
コンビ 運命改変ゲーム

赤夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンビ 運命改変ゲーム

【Nコード】

N2827X

【作者名】

赤夜叉

【あらすじ】

——おかえり、クズの挑戦者——。ダメ人間的主人公が、再び『リリカルなのは』の世界に帰ってくる。何の取り柄も無い独りの青年と、人に捨てられた独りの少女が出逢い、運命を変える闘いが始まる。——私は、貴方を信じていいの？——

プロローグ

『ようこそ、改運屋^{かいうんや}へ』

気が付けば、暗闇の中で女性の声が聞こえた。百貨店等で聞く、アナウンスのような声だ。

よく見れば、暗闇の中に吹き出しのようなモノがある。表記されてる内容は、先ほど聞こえたアナウンスの言葉と同じだった。

『ココは、貴方のように社会から見放された方を救済する場です。社会不適合者で社会の役に立てないのなら、世界の役に立ちませんか？』

アナウンスが問い掛けると、『はい／いいえ』と選択画面が出現した。コレで選べと言う事だろう。

問い掛けられた者は、しばし考えた。とは言え、本気で真剣に考えている訳ではない。その人物は、日々を自堕落に過ごしていた。だから、今後どうするのかなど、深く考えた事は無い。元々、あまり深く考え込むタイプでは無かった。

もうどうでもいいや、と投げやりな感じで答えた。

『はい』

『ありがとうございます。それでは、まず、貴方のニックネームを入力して下さい』

その人物は、ウームとシンキングタイムに入った。正直、何でもいいのだが、本当に何でもいいのかえって悩んでしまう。

ややあって、その人物は学生時代のあだ名を入力した。

『ニックネーム…リン』

『続いて、年齢の入力をお願いします』

『年齢…23歳』

『続きまして、性別になります』

『性別…男』

『次は、貴方の特技をお願いします』

『特技…無し』

『最後に、貴方が望む物をお書きください』

『望む物…金と彼女』

やっぱり金だよなー、と入力を終えてその人物は思った。

金があれば、大抵の欲しい物は手に入る。

しかし、金を得るには働かなければならない。

その人物は、労働なんかクソ食らえと思ってるダメ人間的思考をしていた。

『ご苦勞様でした。これにて登録は完了致しました』

アナウンスの声が終わると、画面も消えて完全な暗闇に戻った。

この時、その人物はまるで思考力が働いてなかった。慎重さが欠如していた。今居る暗闇の空間、謎のアナウンス等について、何の追及もしなかった。

コレは夢だ、とその人物は思った。

その人物は、樂觀的だった。

銀髪の少女との出会い

気が付けば、リンは倒れていた。うつ伏せになって、白い地面に倒れていた。地面が白いのは、雪が降ってるからだ。勢いは弱く、パラパラと曇天の空から降ってきて、地面を白銀の世界に塗り替えていた。

冷たい感触で、リンも白の正体が雪だと解った。
しかし、だからどうこうするつもりはない。

——凍死か……凍死なら、もしかしたら楽に死ねるかも……。
危ない考えを頭に浮かべ、リンは目を閉じた。

寒さで体は震えてるが、苦しい訳じゃない。その内、寒さで感覚も麻痺するだろう。そうなれば、寒さも感じなくなるかもしれない。
リンは、このまま死んでもいいと思っていた。何かやりたい事がある訳でも無い、役に立つ技術や特技も持ち合わせていない。

働かない奴は、この世に——少なくとも人間社会に必要な無い。
だからリンは、どうせ生きてて邪魔になるなら、このまま死のう
と思っていた。

しかし、そうはいかなかった。

「起きなさあい」

「ぐべっ!？」

いきなりリンは、頭、いや顔を踏まれた。雪の上に晒していた右頬を、ガツと強めに。

「いってえ……! んだよっ……!？」

踏まれて痛い頬を手で押さえ、リンは涙目で相手を睨んだ。
その瞬間、睨みは消えた。

驚く事が幾つかあって、思わず目を見開き、言葉を失った。彼の目の前に、少女が一人居た。その少女は、小柄な少女よりも更に小柄で、人形並ドールの大きさをしていた。服装は、逆十字の柄が入った白と黒を基調としたデザインのドレスで、黒のロングブーツを履いている。着ているドレスや頭に付けてるカチューシャ、ロングブーツには薄紫色の薔薇の装飾が付いている。両肩には、黒い羽装飾のような物が付いていた。そして少女の日本人離れした銀色の長髪、透き通るような白い肌、宝石のように紅い瞳は、それこそ人形のような美しさをしていた。

美しい容姿にも驚きだが、更に驚きなのが、その少女が宙に浮いている事だった。空中浮遊のマジックなのか、種は解らないが、とにかく少女は目の前で浮いている。

そんな不思議で芸術品のような美しい少女に、リンは見惚れていた。少女の全てが、リンの意識を一瞬で引きずり込んで虜にした。出す言葉が見つからず、沈黙してるリンを見て焦れたのか、少女は少し不機嫌そうに言った。

「ちょっとお？ 貴方、何をボートとしてるのお？」

「え……？ あ、ああ………すいません」

貴女に見惚れてました、とは言えず、我に返ったリンは軽く頭を下げた。

そこでリンは、初めて自分が何処に居るのか疑問に思った。周りを見渡すと、見覚えの無い道だった。住宅街の道など、どこも同じに見えるが、さすがに地元や知ってる街の道くらいは見分けがつく。見覚えが無い、と言う事は、知らない街なのだろう。

そう思ったリンは、また疑問を抱いた。自分は確か、就活もしないで部屋のベッドで寝ていたはずだ。それが、どうして外に、しかも見知らぬ道端に倒れていたのか。

目の前に佇む不思議少女なら、何か知ってるかもしれないと思い、

訊いてみた。

「あの、ここは何処ですか？」と何故か敬語になってしまった。

「ここは、海鳴市よお」

「海鳴市？」

街の名前を聞いたが、リンは首を傾げた。外出する際の行動範囲が狭い為、街の名前を聞いても解らなかった。

少女は、そんなリンを値踏みするように見ていた。

「なあんにも聞いてないのねえ、貴方。それに、見た目通り地味でパツとしない人間ねえ」

クスッ、と少女は鼻で笑った。

相手が綺麗な少女とは言え、これにはリンも少しムツとなる。

「失礼な……。キミは誰なの？」

「私は、水銀燈すいぎんどうよお」

「水銀燈？」

聞き慣れない名前に、思わず聞き返した。名字なのか下の名前なのか、よく判らない。と言うか、本名かどうかとも疑わしい。

疑問に眉をひそめていると、水銀燈は身を翻した。

「ついてきなさい。仕事を始めるわよお」

「え？ 仕事？」

「貴方、改運屋に登録したんでしょう？」

改運屋、と言う言葉を聞いて、リンは思い出した。ココで目を覚ます前に、何かに登録した記憶が、ぼんやりとだが覚えている。

「ああ……確か、そんな名前だったような……」

「覚えてないのお？ おばかさねえ」

少女の言葉に、またリンはムツとなった。言葉そのもの以外に、少女の小馬鹿にしたような猫なで声が、更に神経を刺激する。

「どうせ馬鹿ですよ」

しかし、リンは反論するでなく、ただいじけて呟くだけだった。自分が馬鹿なのは間違いないので、言い返す言葉が無いのだ。

リンの悔しそうな様子が可笑しくて、水銀燈は笑った。

「別に、貴方は何にも解らなくていいのよ、おばかさあん。どうせ何の役に立たないんだから、おとなしくついてきてくれれば、それでいいのよお」

終始小馬鹿にしながら、水銀燈は宙を飛んで移動を始めた。

真っ直ぐ前に飛んでいく水銀燈の後ろ姿を見ながら、リンは舌打ちした。何で初対面で、しかもあんなちっこい少女に馬鹿にされなきゃいけないんだ？ だが、少女の言うことは事実なので、やはりリンは反論出来なかった。

家に帰る道のりも解らないし、改運屋や仕事とやらの少なからず興味があつたので、仕方なくリンは水銀燈の後を追った。

「宙に浮いてるのって、ソレ手品？」

すると、「おばかさあん」と返事が返ってきた。

＊

水銀燈の後をしばらく歩いたリンは、丘にある小さな公園に着いた。

雪が降るなか辿り着いた公園には、一人の女が立っていた。後ろ姿だが、長い銀髪とスカートから女だと判明出来た。

今日は銀髪の女とよく会うな、とリンは思った。

すると、女はリン達の気配に気付いたのか、振り返って後ろを向いた。綺麗に整った顔立ちで、一目で美人だと言える。瞳の色は紅く、若干の違いはあるが水銀燈を大人にした感じた。胸は大きく、モデルのような体型で水銀燈に勝るとも劣らない魅力的な女だが、雪が降ってるクソ寒い中をノースリーブで丈の短い黒のワンピース姿でいるのは、不自然でならない。

「貴方達は……？」

「ごきげんよう、リインフォース」

「何故、私の名を……！？」

水銀燈が挨拶の後に口にした名前を聞いて、銀髪の美女が動揺を見せる。

リインフォース。銀髪の美女の反応から察するに、ソレが彼女の名前なのだろう。二人は初対面のようなだが、どうして水銀燈がリインフォースの名前を知っているのかは、疑問に思いつながらも深くは考えなかった。まあいいか、とその程度の疑問だった。

だが、本人にとっては重大な問題だったらしい。名前を口にした水銀燈やリンに対して、リインフォースは警戒心を露にした。

「貴方達は何者ですか……？」

「うふふ。そんな怖い顔しないでえ。折角の綺麗な顔が台無しよお

「？」

意地悪く笑う水銀燈の傍で、コイツ性格悪いな、とリンは思った。

「安心しなさい。私達は、別に貴女に危害を加える気はないわあ。
寧ろ、その逆……貴女を救いに来たのよお」

「何だと!？」

リインフォースが目を見開き、先程よりも動揺する。

話の内容が全く解らないリンは、置いてきぼりの状態で軽く混乱していた。

「あ、あのー」

リンは、遠慮がちに手を挙げた。

「すいません。ちょっと話が全然見えてこないんで……説明してくれると助かるんですけど……」

状況の説明を求めると、水銀燈は面倒臭そうに、それでいて呆れた風に溜め息をついた。

それからリンは、リインフォースから色々と事情を聞いた。魔法や次元世界の存在、過去の超文明の危険遺産^{ロストロギア}、海鳴市で起こった事件等々、一度に覚えきれない量だった。

水銀燈はと言うと、説明はリインフォースに全部任せて、ベンチに腰かけて楽していた。

一方で、一通りの説明を聞いたリンは、魔法や異世界の事よりも驚きな事があった。

「あの……正直な感想いいですか？」

「はい、どうぞ」

リインフォースに促され、失礼と承知しつつリンは素直な感想を口にした。

「うん。話に出てきた魔法少女達って、同じ人間とは思えないですよね」

「え……？」

リインフォースは訝り、興味を持ったのか水銀燈も聞き耳を立てる。

「まあ、空飛んだりその他諸々は魔法だから、ある意味当然っちゃあ当然ですけど……特にあの、映像に映ってた高町なのはって娘？

赤髪っぽい女の子に「悪魔め」って言われたら「悪魔でいいよ。」

悪魔らしいやり方で説得する」とか何とか言って……アレ、普通の小三が言える台詞じゃないですよ？ え？ 何かあったんですか、あの娘？ 何が小三の女の子を、あんな風にしたんですか？」

「そ、それは……守護騎士達と衝突を繰り返して、彼女も辛かったのでしょうか」

答えるリインフォースは、苦笑いだった。

「絶対ヤバイですって。小さい頃からあんなんじゃない、将来ロクな大人になりませんよ？」

見た目は子供、精神はヤバイ大人なコ●ンと言ったところか。思考が根暗と言うか、ダークな面に進んでる感じだ。

話に区切りがついたのを見計らって、水銀燈が割って入った。

「まあ、その娘がどんな性格をしようとか、将来どんな大人になろうとか、私達には関係無いでしょう。それよりも、事態の方は把握出来たのかしらあ？」

「ええ、まあ……」

「なら、本題に入りましょう」

本題、とはリインフォースの件だ。

つい先日、この海鳴市で『闇の書』——正確には『夜天の書』を巡る大事件が発生した。夜天の書とは、様々な魔導師の魔法を記録する魔導書で、主を変えて長い旅をしてきた本だ。ところが、歴代の主の中で、何を思ったのか魔導書のシステムを改変させて、闇の書なんて物騒な代物に変えてしまったのだ。主の命ばかりか、周囲を巻き込んで破壊と悲劇を繰り返してきた魔導書は、この海鳴市で新たな主を得て再び動き出した。その魔導書の管制人格が、リインフォースなのだ。他にも、主の警護や魔導書完成の為に魔力の源とも呼べるリンカーコア蒐集に動く四人の守護騎士が存在するが、ソレは今とはさほど関係無い。重要なのは、リインフォースの中に破壊の根元となるプログラムが存在してる事である。魔法なのに、何故プログラムなんて科学的なモノがあるのか疑問だが、ソコはスルーの姿勢でいこう。

主の命を蝕み、破壊活動をしてきた防衛プログラムと呼ばれるモノは、先にリンが口に出した高町なのはと仲間達によって消滅された。しかし、そのプログラムを産み出す元となるプログラムは、いまだリインフォースの中に在るのだ。今の主を想ってリインフォースは、プログラムごと自らの消滅をなのは達に頼んだ。

消滅の儀式は、この場所で行い、リインフォースが先に来てなのは達を待っている状態である。ちなみに、なのは達はまだ気持ちの整理がついていない。

話を聞いたリンは、何と言うか、呆れた気持ちを抱いていた。自分を消してくれ、とはつまり、可能性を捨ててと言う事だ。映像を加えた説明で、なのは達がどれだけ頑張ったか、主である八神はやてがどれだけ家族想いか、ある程度解ったつもりだ。

ソレ等を踏まえて、思う。

諦めんの早すぎじゃね？

何度も激しい衝突を繰り返して、苦難困難を乗り越えて、ようやくお互い解り合えたのに、最後はロクに抗いもせずに消える。ロクに解決法を探そうともせずに、消そうとしてる。

自分はダメ人間だから、偉そうな事は言えない。いや、ダメ人間だからこそ断言出来る。なのは達は、可能性を見ていない。可能性を追わない奴は、ダメ人間と同じ。なのは達はまだ子供だから、しようがないと言えはそれまでだが、防衛プログラムを破壊するところまでは、何があっても決して諦めない根強い姿勢をしていた。だからこそ、最後の最後での諦めの早さに納得がいかず、呆れた。偉そうな事は言えないから、口には出さないが、何だか妙に拍子抜けした気分だった。

少々しかめっ面なリンの横で、水銀燈は不敵な笑みで告げた。

「リインフォース。貴方の中にある厄介なプログラムを、私が壊してあげるわあ」

「何っ………!？」

リインフォースは驚き、目を丸くさせた。
しかし、すぐに表情を曇らせた。

「不可能だ………!」

「ふふふ。私を、他の能無しと一緒にしないでくれるかしらあ？」

能無しって、まさか高町達の事じゃねーだろうな？ とリンは思

った。答えを聞くのが怖いので、事実確認はしなかった。

ネガティブなリインフォースに対し、よほど自信があるのか、水銀燈は笑みを崩さない。

「私が貴女の中に入って、直接プログラムを破壊するのよお」
「えっ!？」

リインフォースは、本日何度目かになる驚きの声を上げた。
話を聞きながら、リンは自分が居る必要性を疑問に思っていた。

私の為に生きなさい

リインフォース救済の内容は、いたってシンプルだ。体内に在る除去不可能な質タチの悪い寄生虫プログラムを、体内に侵入して直接破壊すると言うものだ。

シンプルな方法だが、実際に出来るのかリンは疑問に思った。いくら水銀燈の体格が小さいと言っても、人の体内に入れる程ではない。

しかし、彼の抱いた問題は問題にすらならなかった。

水銀燈は、人間ではなく、リインフォースと似たような存在なのだ。魔力によって身体は構成され、彼女は自分の大きさを自由に変わられる。実際に、目の前で実演してみせてくれた。みるみる小さくなっていき、最終的には米粒並の大きさになった。これには、目を丸くして驚いた。まるで、狐につままれたような、不思議な感じだった。

「それじゃあ、リインフォース。お口を開けてちょうだい」

水銀燈が促して、リインフォースの口を開けさせた。

どうでもいいが、とリンは思う。その猫なで声的なしゃべり方は、ナチュラルなのかワザとなるのだろうか。

そんなどうでもいい事を一瞬考えた直後、リンは慌てて水銀燈に声をかけた。

「水銀燈」

「なあに？ 気安く名前を呼ばないでちょうだい」

振り返った水銀燈が早速吐いたのは、刺々しい言葉だった。どうやら、リンの事を快く思っていないらしい。

多少心がへコンだリンだったが、気を取り直して尋ねた。

「あの……何か、俺にもやる事とかある？」

「無いわあ。貴方は、ココでリインフォースと適当にお喋りでもしてなさあい」

小馬鹿にした台詞を吐いて、水銀燈は口からリインフォースの体内に入った。

残されたリンは、しかめっ面で溜め息をついた。これじゃあ、本当に何の為に自分は居るのか解らない。仕事と言って連れてこられたが、実際はこうしてほったらかしにされる始末だ。まあ、体内に入れないなら、他に何もする事が無いのも事実だ。

結局、魔法とは無縁の凡人なリンに、出来る事など何一つ無いと言う事だ。とことんまで使えない自分を、リンは鼻で小さく笑った。水銀燈への怒りは無い。至極真つ当な意見とすら思った。

「大丈夫ですか？」

そんな落ち込んでるリンに、リインフォースが声をかけた。

顔を上げれば、リインフォースは心配した表情でこちらを見ていた。

「はい。大丈夫です」

リンにとって、他人の優しさに触れたのは久しぶりだった。だからだろう。リインフォースの気遣いが、かなり嬉しかった。

＊

水銀燈がリインフォースの中に入ってから、どれくらいの時間が経ったのだろうか？

多分、三分か五分の短い時間だろう。だが、感覚的には十分位だった。外でリインフォースと待つリンは、特に会話もせず黙っていた。その場の沈黙が、時間経過の感覚を狂わせているのだろう。リンは、あまり自分から話し掛けるような、積極的な人間ではない。それに、仮に会話をしたとしても、きっと長くは続かない。口下手なリンに、初対面の人との長時間の会話は無理だった。

それにしても寒い、とリンは震えた。長袖に長ズボンだが、厚着とは言えない格好をしている。雪が降る中を耐えるには、あまりに頼りない。薄着のリインフォースは寒くないのだろうか？ と目を向ければ、彼女は涼しい顔をして向かいのベンチに座っている。管制人格とやらは、寒さを感じないのかもしれない。

ふとリンは、公園内に設置されてる時計を見つけた。時間経過を確認しようと思ったが、水銀燈が何時体内に入ったのか解らない事に気付き、やめた。

白い息を吐いて、リンは雪を降らす灰色の空を見上げた。

水銀燈の事が、少し気になった。本人はかなり自信満々な様子だったが、大丈夫だろうか？ 自分はボケーツと待ってるだけでいいのだろうか？ 中の様子ぐらい見れないのだろうか？ 自己への問い掛けが、頭の中を飛び交う。次第に落ち着きが削られていき、貧乏揺すりまで始めた。大抵の事は気になっても、すぐに「まあいいか」と考えるのをやめるのだが、この時は違った。

意を決して、リンは沈黙を破った。

「あの……」

「何ですか？」

リインフォースの紅い瞳が、こちらに向く。

「その、中の様子とか見れないんですか？　ちょっと気になっちゃって……」

「ソレは無理です。自分の体内の様子を、映像に流す事は出来ません」

申し訳なさそうに、リインフォースは答えた。

地球の技術よりだいぶ進歩してるから、もしかしたらと思ったが、まあ無理なものは仕方ない。

「じゃあ、他にリインフォースの中に入る方法とか、あったりします？」

言った後でリンは、自分の言葉に顔を熱くさせた。自分で言っていて何だが、言い方が卑猥に聞こえるのだ。周りに人が居なくて良かったと、心底思った。

二つ目の問い掛けに対して、しばし考えてからリインフォースは答えた。

「その方法は、無くはないです。『安らかな夢を見せる』と言う形で、相手を私の中に引き入れる魔法があります。それなら、体を小さくしなくても私の中に入る事が出来る」

なるほど、とリンは頷いた。

答えを聞いて、さてどうするか？　と考える。リインフォースの体内に入るのは、出来ない事じゃないのは解った。それに、やはり魔法と言う未知の力には興味があるし、リインフォースの中に入ってみた気も少なからずあった。

しかし、と思う。入ってどうする？　もしかしたら、水銀燈は目的を達成させてるかもしれない。例えばプログラム破壊に苦戦してた

としても、自分が行っても邪魔にしかならないんじゃないか？
悩むリンは、でも、と思い直す。

「あの、ソレで俺を貴女の中に入れてくれませんか？」

このまま何もせずに、ボーッとしていたら、男として何だか情けない気がした。本当に、何の為に来たのか解らなくなってしまふ。それに、外は寒い。リインフォースは平気みたいだが、このままじゃ風邪を引いてしまふ。

そして最大の理由は、やっぱり水銀燈だった。中に入った水銀燈が、どうなってるのか気になる。

リンの頼みに、リインフォースは戸惑いを見せる。

「ですが、貴方は魔導師では無い。普通の人間が入って、安全である保証はありません」

「仮に魔導師でも、安全の保証なんて無いんでしょう？ だったら、同じ事です。それに、水銀燈がもう済ませちゃってる可能性もありますし」

この時点では、まだリンは暢気だった。

基本的に、リンは深く考えない暢気な人間なのだ。

リインフォースは黙って顔を逸らし、迷った。出来る事なら、無関係の人間を巻き込みたくはない。だから、リインフォースは断ろうとした。

しかし、この日、この時、リンは珍しくしつこい位に粘った。どちらかと言えば、リンは消極的な性格の人間だ。リインフォースの救出だって、そんなに乗り気でも無い。魔法等の存在は魅力的だが、危ない目に遭うのは御免だからだ。それでも交渉を粘るのは、彼女の中に入った水銀燈が気になるからだ。他人の事が、こんなに気になったのは、もしかしたら初めてかもしれない。

水銀燈を心配するリンの気持ちを察したのか、それとも単に粘りに負けたのか、最後は渋々と言った様子でリインフォースは承諾した。

リインフォースの魔法で、リンの体が淡い光に包まれていく。アニメの中でしか見てこなかった不可思議な現象が自分の身に起こり、リンは緊張して唾を飲み込んだ。

光は段々強くなっていき、やがて眩しさに目を閉じた。

＊

光が消えたのを瞼越しに感じて、リンは目を開けた。

「わお……」

目の前の光景に、思わず小さな声を漏らす。

リインフォースの体内と思われる場所に、リンは居た。薄暗い通路で、大小のコードのような物が床に伸びている。人が居ないから当然だが、中は不気味な程に静かだった。耳を澄まさなくても、聞こえるのは自分の呼吸音だけだ。

外の寒さとは別の寒気を感じて、リンは自分の腕を擦った。

「ココは、体のどの辺りなんだ？」

特に場所の指定をしなかったので、自分が何処に居るのか解らない。

とりあえず、リンは通路を進む事にした。ココで立ち止まってても、何にも解決しない。暗い場所に一人は心細くて不安だが、仕方ない。

足音を鳴らして、リンは通路を歩いていった。

しばらく歩いて、不意に通路の先から音が聞こえてきた。途中で立ち止まり、耳を澄ませてみると、何か壊れるような、爆発したような音が聞こえる。心を奮い立たせて、リンは足音を殺した忍び足で前に進む。出口に近づくにつれ、心臓の鼓動が高鳴る。出口から数メートルの地点で、爆音の他に振動まで伝わってきた。

辿り着いた出口から、恐る恐る顔を覗かせた。

「なっ……!？」

その瞬間、リンは目を見開いて短い声を上げた。

平凡な日々を生きてきたリンにとって、衝撃の光景だった。通路を出た先は、巨大な空間が広がっていた。その空間に、水銀燈は居た。

いや、水銀燈だけではない。彼女の前に、とんでもなく大きなモノがそびえ立っている。リンは、ソイツを見て度肝を抜いていた。何と言えいいのか。複数の生き物が合わさったような、複合体のような化け物。頭部は鰐ワニ、体はゴリラのような屈強な体躯、その体のあちこちから無数の触手が生えており、蛇のように動いている。有名な怪獣映画に出てくる、植物怪獣を連想させる圧倒的巨体に、リンは息を飲んだ。

何だアレ？ 何だアレ？ 何だアレ？ 何だアレ？

何だアレ？ 何だアレ？ 何だアレ？

パニックになって、頭が冷静に働かない。

怪獣にも驚きだが、更に驚かされたのは水銀燈だ。あの人形サイズの体で、何十何百倍はあろうかと言う巨体の怪獣に立ち向かい、闘っているのだ。自分だったら、五秒も持たないだろう。しかし、水銀燈は魔導師のような技を駆使して、怪獣と闘っている。

だが、体格や力の量等に差がありすぎて、押されているのは一目で判った。明らかにピンチだ。

どうすればいい？ どうすれば……？
隠れて見てるリンは、オロオロとしていた。

＊

水銀燈は、苦戦をしていた。

リインフォースの体内に入った水銀燈は、魔力探知で元凶であるプログラムをすぐに見つけた。一気に消しにかかったが、防衛システムが働いて防がれてしまい、激しい戦闘に突入する。

巨大な怪物に変貌したプログラムは、異様な威圧感を放って攻撃を仕掛けてくる。先端の尖った複数の触手を、猛スピードで槍のように突いてくる。襲ってくる触手の群れを、水銀燈は魔力で作った半透明の障壁を張って防ぐ。突きの威力で障壁にはヒビが走り、力負けして後方へ押された。

しかし、水銀燈も黙ってやられてばかりでなく、反撃をする。両肩にある黒羽装飾が、形を変えて黒い龍になった。大きく開かれた口の前に魔法陣が展開され、龍から青い火炎が放射される。だが、プログラムも同じように障壁を張って火炎を防御した。

「くっ……！」

悔しそうに顔を歪め、水銀燈は追撃をする。

複数の羽根に魔力を通して硬度を強化させ、黒い矢のようにプログラム目掛け一斉に飛ばす。全弾が障壁に命中するが、破れる様子は無い。プログラムも受けてばかりはおらず、開いた大口に紫色の魔力を溜め、砲撃のように放った。水銀燈は宙を舞い、間一髪で砲撃を避けた。

攻撃の質量に差がありすぎて、水銀燈は押されていた。しかも、

ココはリインフォースの中であり、彼女と繋がっているプログラムは魔力を得ているので、力尽きる事が無い。

戦況は圧倒的に不利だが、しかし水銀燈は闘う事を止めようとはしなかった。

——私は負けない。

何度防がれ、弾かれても攻撃を続ける。

——私は、一人で勝ってみせる。

迫る触手が、刃のように水銀燈を切り刻む。

——今までだって、一人でやってきたわ。

闘い続ける水銀燈の脳裏に、過去の映像が過った。

「駄目だ……失敗だな」

「ユニゾンデバイスとは、また別の新たなデバイスをと期待していたが……」

「魔力の消費が激しすぎる……これでは、マスターになった者の身がもたんぞ」

「やはり、失敗作か……」

とある研究所での露骨に落胆を表した研究員の言葉に、水銀燈は怒りを込み上げていく。両手を前にかざし、魔法陣を展開させた。

「私は……私は失敗作なんかじゃないっ！」

過去の言葉を振り払い、水銀燈は感情を乗せた魔法を放つ。眼前のプログラムを撃ち抜かんと、青い閃光が宙を駆ける。

青い閃光はプログラムが張った障壁に衝突し、炸裂音を立てて爆発した。空間に振動が広がり、巨体のプログラムは煙によって姿が隠れた。

砲撃を放った水銀燈は、少し息を荒げて煙を睨むように見据える。晴れてきた煙の中から、無傷のプログラムが現れた。障壁は三枚

重ねになっており、水銀燈が破壊したのは、外側の一枚だけだった。

「そんな……!？」

水銀燈の目が、驚愕に見開かれた。

初めて自分の力が通じない相手と出会って、強いショックを受けていた。自分以上の強大な相手を前に、水銀燈はその場で立ち尽くしてしまう。よろめき、軽く突いただけで倒れてしまいそうだ。

動きが止まった標的に狙いを定め、プログラムは触手を放つ。

精神的ショックを受けた水銀燈は、避ける素振りすら見せない。

触手が迫り来る中、別方向から走ってくる影が一つ。触手の鋭い先端が水銀燈に届く寸前で、影は彼女の小さな体を抱えて走り抜く。ギリギリのタイミングで、何本かの触手が影の背中を掠^{かす}った。

「あわばば……!」

情けない声を上げたのは、顔を真っ青にしたリンだった。

彼に抱えられた水銀燈は、何が起きたのか解らず、軽く混乱していた。

「なっ……!？ 人間っ……!？ 貴方、どうして……!？」

「う、うはははは！ な、何だコレ……!？ 何だアレ……!？ 恐すぎて凄すぎて、逆に笑えてきたぞ……!」

助けに入った本人も、半狂乱になって涙目で笑う。

人間、恐怖の限界を超えると笑ってしまう時があるようだ。

無我夢中で水銀燈を助けたリンは、プログラムの目から逃れるように瓦礫の陰に身を隠した。

「し……しし、死ぬかと思ったあ……!」

全速力で走った疲労と精神的な疲労が重なって、リンは汗びっしよりで息を乱す。足も震えていて、恐怖の痺れが抜けていない。高ぶった気持ちを鎮めるように、息を吸って吐く。

いまだリンに抱えられてる水銀燈は、彼の登場に困惑していた。

「貴方……どうやってココに……？」

「え……？ どうやって……ええっと……ああ、そうだ。あの、リンフォースさんに頼んで入れてもらいました。別の方法がありました……」

混乱してる頭で、リンは何とか答える事が出来た。

答えた後で、そっと瓦礫から顔を覗かせてプログラムを見た。周囲を見回して、リン達の姿を探している。目だけでなく、触手も伸ばして周りを探っていた。

「ヤバッ……！」

即座に顔を引っ込め、リンは水銀燈を抱えたまま、低姿勢で静かに、ゆっくりと移動を開始した。

なるべく、プログラムから離れよう。今すぐ駆け出したい衝動を必死に押さえて、音を極力殺して移動する。

すると、腕の中から水銀燈が抑えた声で言った。

「貴方、何しにきたの……？」

「何しに……その……水銀燈の事が、気になって……」

「なっ……！？」

信じられないと言った風に、水銀燈は目を見開いた。

「私の事が気になって？ たったそれだけの理由で、ココに入ってたて言うの……？ 貴方、本当に馬鹿じゃないのお……！」

「はい。俺は馬鹿です……」

リンの言葉に、水銀燈は驚いて言葉を失う。

いや、驚きを通り越して呆れてるのかもしれない。馬鹿と言われて、「はい。馬鹿です」と即答した馬鹿さ加減と、気が強い訳でもないのに怪物相手に助けに入った馬鹿さ加減に、水銀燈は呆れたのだろう。

最初の頃より落ち着いてきたリンは、こんな事を語り出す。

「水銀燈……俺は、何をやっても駄目なクズなんです。頭は悪いし、運動も得意って訳じゃない……仕事では失敗の連続で迷惑ばかりかけて、上司からの叱りに耐えられなくて辞めちゃいました……」

俺、何の為に生きてるのか、解らなくなっちゃって……死のうかになって、自殺まで考えました……。でも、結局出来なくて……そんな時に、改運屋を通じて、リインフォースに会って思ったんです。沢山の人から大切に想われて、この人はなんて幸せな人なんだろうって……幸せなクセに、何死のうとしてんだって……。自分を想ってる人が居るのに、死ぬなんてふざけるなって思ったんです。死んでいいのは、俺みたいな誰からも想われないクズなんです……。そう考えたら、何か羨ましくて、悔しくて……」

「……何が言いたいのかしら？」

話を聞く水銀燈の目が、僅かに細くなった。

リンが続ける。

「えっと……すいません。混乱してて、自分でも何が言いたいのか……。だから、その、何て言うか……」

俺、水銀燈が好きです……！」

「……はあ？」

あまりに予想外で場違いな台詞に、水銀燈は間抜けな声を漏らした。

告白をしたリンも、顔を赤くさせていた。時と場所を考えずに言った馬鹿な告白で、本人は人生最大の羞恥を味わった。他に人が居ない事が、唯一の救いだった。

まだ少し混乱していたリンは、一種の極度の興奮状態に陥り、半ばヤケクソ気味に告白したようなものだった。

自分の爆弾発言に当惑するリンに、水銀燈は冷ややかな眼差しを向けて言う。

「……貴方、本気で言ってるの？」

「え……？ ええっと……まあ、割りと本気、です……」

本人から目を逸らして、リンは途切れ途切れに答えた。

一目惚れ、と言うヤツだった。人間では到達出来ない妖しく神秘的な美しさを持った銀髪の少女に、リンは心を奪われ、恋をしたのだ。ラインフォースの中に入った水銀燈を気にかけていたのも、彼女を好きになっていたからである。

そして何より、自分を想ってくれる存在が欲しかった。その思いから、先ほどの告白を口にしたのかもしれない。

リンの気持ちの本気だと解ると、水銀燈は呆れた様子で溜め息をついた。

「人形の私を好きになるなんて……貴方って、物好きなおばかさんねえ」

「……はい。超馬鹿です」

弁明の余地もない。恥ずかしくて、リンは死にたくなった。いつ

そ、あの怪物に殺されたい気分だった。

一方、水銀燈はどうするか考えていた。あの怪物を破壊したいのは山々だが、今のままでは勝てないのは明白だ。

しかし、そこへリンが現れた事で一つの勝機——可能性が生まれた。だが、ソレはずっと独りで闘ってきた水銀燈にとって、苦渋の選択とも言える選択肢だった。過去の出来事から、人間そのものに嫌悪感を抱いている。それは、リンも例外ではない。

ところが、その気持ちだが、ここに来て急に揺らいだ。リンが、本気で水銀燈を好きで助けに來たからだ。ついでに、自分は馬鹿でクズだと身の程を弁^{わきま}えている。

しばし逡巡の表情で黙っていた水銀燈が、口を開きかけた時だった。

移動していたリンのすぐ横の床に、触手が一本突き刺さった。

「うわあっ！」

驚き怯えるリンは、悲鳴を上げて尻餅をついた。

見つけて攻撃した訳ではなく、探っていた触手が、たまたま近くの床に刺さったようだ。

しかし、今のリンの悲鳴で完全に居所がバレた。悲鳴を聞いたプログラムが、紫色の双眸を二人に向けた。

淡く光る不気味な双眸に見つかり、リンは腰を抜かして立てなかった。水銀燈を抱えて、後ろに後ずさる。

「あ……ああ……」

立ち上がる事すら出来ないリンは、蒼い顔でガタガタ震えていた。巨大な怪物の威圧感に圧され、呼吸が乱れる。いや、呼吸をしているのかさえ、自分でもよく分からない。それほどまでに、リンは精神的に追い詰められていた。

恐怖に支配され、動かなくなったリンが心中で願った事は一つ。
死にたくない。

ただそれだけだった。人間とは、環境次第でコロコロと考えが変わる生き物だ。

「人間……」

我を失ったリンを引き戻したのは、不意に聞こえた水銀燈の声だった。

「貴方……本当に私が好きなの……？」

「え……？」

こんな時に何を？　と思っただ、恐くて口答えするどころでは無かった。

怯えた様子で、リンはガクガク縦に頷いた。もう殆ど声は出ない。
否、出せる状態では無かった。

それでもリンの答えは伝わったようで、水銀燈は満足そうに笑った。

リンの腕から抜けると、水銀燈は顔を近づけてきた。紅い瞳と白い肌のせい、妙に妖艶な笑みに見える。

「そう……。なら、人間……貴方の全てを、この水銀燈に捧げなさい……！」

この水銀燈の糧^{かて}となって、この水銀燈の為に生きなさい……！」

言い終わった直後、水銀燈の顔が急接近してきた。

そして、リンの口に、自分の白い唇を重ねた。

突然のキスに、リンは驚いて目を見開き、固まった。

次の瞬間、二人が居る地点に青い魔法陣が出現して、強い輝きを

発
し
た。
。

私の為に生きなさい（後書き）

感想お待ちしています。

おやすみなさい、壊れた子

水銀燈とリンの唇が重なり、足下に出現した青い魔法陣の輝きに二人は包まれた。

光の中で弱っていた水銀燈の体に、力がみなぎる。魔力が全身を駆け巡り、受けた傷が治癒されていく。ボロボロに刻まれた黒のドレスも、元通り綺麗に修復する。両肩に飾られてる黒い羽装飾が大きくなくなっていき、成人以上のサイズになった巨大な翼を羽ばたかせ、周囲に黒い羽根を撒き散らす。

唇を離し、魔力を得た水銀燈は不敵に笑う。

水銀燈は、人では無い。魔法技術が発展している異世界・ミッドチルダの研究施設で、人工的に造り出された魔導兵器なのだ。デバイスと呼ばれ、ストレージ、インテリジェント、ユニゾンと様々な種類があるが、基本的には魔導師が魔法を使用する際に補助を行う道具である。水銀燈も一応、デバイスの部類に入るが、他の種類とは別物であった。その力は、人間と“契約”する事で初めて真価を発揮する。

「な……な……!？」

目の前に座っているリンは、間抜け顔で淡い光を纏った水銀燈を見ていた。いきなりのキスと先程の現象に、面食らっているようだ。そんな彼の反応が可笑しくて、水銀燈はクスリと笑った。自信を取り戻した水銀燈は、淡い光を纏った身を翻してプログラムに向き直る。管制人格の中に巢食い力を一方的に吸い上げている怪物と、“契約”によって人間と繋がって力を得た人形が、戦場で再び対峙する。

水銀燈の変化に、プログラムは危険を察知して先攻に出た。数多くの触手を操り、水銀燈を貫かんと高速で伸ばす。対して水銀燈は

右手を前にかざし、半透明の障壁を張って防御する。触手が一斉に容赦なく突くが、今度はヒビ一つ入らない。さっきとうって変わり、水銀燈は余裕の笑みを浮かべている。彼女の後ろでは、リンが怯えて蒼い顔で目を剥いていた。

触手では罅があかないと判断したプログラムは、鰐おおぐちの大口を開けて砲撃の為の魔力を溜める。相手を逃がさないよう、障壁ごと触手を巻き付けて動きを封じた。捕まった状態に陥ってリンは不安顔だが、水銀燈の表情は崩れない。

そして魔力が溜まり、プログラムの開いた大口から極太の魔砲を放たれる。魔力の塊は紫色の極太閃光となって、水銀燈達に迫り、次の瞬間、障壁を飲み込んで大爆発を起こした。

爆発の衝撃で広い空間が揺れ、天井が軋み、パラパラと塵ちりが降ってくる。空間には煙が広がり、巨体のプログラムの体も下半分を隠す程の量だ。

やがて、徐々に煙が晴れていった。

その中から、笑い声が上がった。

「うふふ。もう終わりがしらあ……？」

煙の中から、無傷で障壁の中に居る水銀燈とリンの姿が現れた。

さっきと逆の展開に、プログラムの双眸が大きく見開かれる。初めて自分の存在を脅かす敵を前にして、ジリジリと巨体を後ろに退さげる。

水銀燈は障壁を解くと、両手を前にかざした。

「今度は私の番ね。さっきのお礼をしてあげる……！」

両手の前に青い魔法陣を展開させ、後退りするプログラムに狙いを定め、

「消えなさいっ！」

魔法陣から、青い魔砲を発射した。

その魔砲は、先程防がれた時より一回りも二回りも大きく、美しく輝き、プログラムの巨体を飲み込んだ。残った二重の障壁が、硝子^{ラス}のように軽く粉々に砕けた。

やがて閃光が消え、砲撃の跡が見えてきた。

水銀燈は舌打ちした。

プログラムは、まだ消滅していなかった。巨体に見合ったしぶとさで、触手を全て失い、鰐顔も右側半分を失い、巨大な体も所々欠ける箇所がありながらも、生き残っていた。しかし、やはり受けたダメージが大きく、反撃どころか動く事すらままならない状態のようだ。逃亡や敵を倒すより、存在する事を最優先に選んだプログラムは、すぐに新たな半球状の障壁を張り、防御しつつ自己修復を開始する。破損状況が悪く、修復に手間取っていた。

そして、修復が終わるのを待つ程、水銀燈は甘くはない。

すぐにでもトドメの一撃を放とうとした、その時だった。

後ろから、ドサツと倒れる音が聞こえ、水銀燈は構えを解いて振り返った。

「人間っ！」

水銀燈の目に飛び込んできたのは、うつ伏せに倒れているリンだった。

リンは眼鏡の奥の目をキツく閉じて、水銀燈を助けに駆け付けた時以上に呼吸を荒げている。地面にベッタリと倒れ伏しており、まるで起きる様子が無い。まるで、長距離マラソンを終えた後の状態みたいで、起き上がる体力すら無いみたいだ。

ゆっくりと顔を上げ、僅かに片目を開けて、整わない息遣いでリ

ンは言った。

「あ……あの……なんか、急に……ものっそい疲れ、たんです……けど……」

本人は訳が解らなかった。キスの後で水銀燈が闘い始めた途端に、ドツと疲労が襲ってきたのだ。何もしないのに得体の知れない疲れが溜まっていき、とうとう立っている事さえ出来ずに倒れてしまった。

辛そうなリンを見て、水銀燈は僅かに目を細めた。

「私と貴方は“契約”をしたの。言ったでしょう？ 貴方の全てを、この水銀燈に捧げなさい……この水銀燈の糧となりなさいって……。貴方の生命エネルギーを魔力に変換して、私が取り込んでるのよお」
「えっ……！？ マ……マジっすか……！？」

リンは、もはや大声を出す事も出来ない。それほどまでに、体が弱っているのだ。

水銀燈は、魔導師では無い普通の人間専用のデバイスとして開発された試作品である。通常、魔法とは魔力を操って行使する現象である。だから、リンカーコアと言う魔力の源を持たない普通の人間は、魔法を使用する事は出来ない。そこで研究員達は、新たなデバイスの製作に取り掛かった。

それが、普通の人間専用デバイスだ。人間や全ての生き物が持っている生命エネルギーを、契約によって魔法に必要な魔力に変換して、主となる普通の人間に代わって闘う。

数多の世界を管理している巨大組織・時空管理局で、一般局員でも捜査に参加出来るようにと発案して、試作品が造られた。それが、水銀燈である。

しかし、問題が発生した。それは、主からデバイスへの魔力供給

の量である。デバイスの戦闘は魔力の消費が激しく、主の体力を大量に奪い、魔法次第では寿命を縮める等の命の危険がある事が、テスト段階で発覚されたのだ。例えるなら、燃費の悪い車だ。これでは、主となった局員は皆ベッド行きになってしまう。まさかデバイスが捜査や戦闘をしている間、ずっと寝ている訳にもいかない。局員の仕事は、何も現場での捜査だけではないのだから。一般局員は直接現場や戦地に赴かず、安全にデスクワークをして、デバイスが現場で捜査をする。理想的な役割分担だが、現実には上手くはいかなかった。

結局、問題点は解決出来ず、今回の計画は破棄、水銀燈も『失敗作』として処分された。

過去の記憶に一瞬、水銀燈の顔が陰しくなったが、すぐに妙な色気のある笑みに変わった。

「さっきの魔砲をもう一発撃てれば、今度こそアレを仕留められるだろうけど、多分、貴方の体力が持たないでしょうねえ。最悪の場合、寿命を縮める事になるわぁ。それでもイイと言うなら撃つけど、どうかしらぁ？」

水銀燈の意地悪な問い掛けに、リンは苦笑した。
どうするか考えたが、思考も短い時間で答えた。

「ああ……別に、イイですよ……撃っちゃって……」
「え……!？」

返答内容が予想外だったらしく、水銀燈は驚いて目を見開いた。
リンは、気の抜けたような、弱りきった声で続ける。

「ちょっと前、までは……自殺も、半ば本気で、考えてましたからね……。まあ、痛いのが嫌で、結局出来なかったけど……そういう

死に方なら、いいかな……？　少なくとも、普通の自殺よりは、痛くなさそうだし……」

さっき、プログラムに殺されそうになったリンは、死にたくないと思った。それは、プログラムに殺されるのは“望まぬ死”だったからだ。喰われる、潰される、切り裂かれる、どれも痛そうで苦しそうだ。

その点、水銀燈への魔力供給自殺は、苦痛の心配は無さそうだ。痛みに比べたら疲労ぐらい、どうって事無い。

それに、口には出さないが、水銀燈の為に死ぬのなら、ソレも悪くない。殺されるのは嫌だが、自分が選んだのなら、ソレは自殺だ。理由を聞いた水銀燈は、毒気を抜かれたような溜め息をつき、リンに背中を向けた。

「あゝあ……やゝめた。嫌がるならともかく、死にたがりなおばかさんを死なせても、なあんにも面白くないわあ」

彼女の言葉に、リンは苦笑する。ドSだな、と内心で呟いた。

一方、魔砲でのトドメをやめた水銀燈は、修復していくプログラムを見据えて別の方法を考えていた。

巨体ごと消し飛ばす事が不可能となった今、残された手段は一つしかない。核を破壊すれば、プログラムの巨体も崩れ落ちる。だが、核を破壊するには、巨体を覆うドーム状の障壁が邪魔だ。自己修復と防御に全ての魔力を回してやるようで、張られてる障壁が先程破った物より強度が増してる事はすぐに解った。今のリンの体力では、アレを破るのは無理だろう。よしんば破れたとしても、プログラムの核まで攻撃魔法が届くか怪しいところだ。

やはり障壁は邪魔だ。障壁を睨むように見据え、水銀燈は考える。そして、ハッと気付く。

「うふふ。見つけたわあ……障壁の穴……！」

不敵な笑みを浮かべ、水銀燈は懷から剣をデザインにしたペンダントのような物を取り出した。待機状態にしたデバイスなのだが、妙な事に刃の部分が無い。

デバイスの待機状態を解いて、水銀燈の手に剣が握られる。翼をデバイスにした鍰の先には、やはり刀身は無いままだ。

「今度こそ、終わりよ……！」

そう言った水銀燈は、剣に魔力を流した。

すると、流された魔力が青い刃となり、剣の刀身となった。

しかし水銀燈は、完成した剣を振り上げ、何を思ったのか地面に魔力刃を突き刺した。あらぬ方向に剣を向けた事に、プログラムも疑問を抱く。

自棄になったとも思える行動だが、次の瞬間、衝撃の展開を生む。突然、場に刺突音しとつおんが響いた。その音と同時に、修復作業をしていたプログラムの動きが停止した。プログラム本人には、何が起ったのか解らないだろうが、第三者の視点から見れば明らかだった。プログラムの脳天から、青い刃が突き出ていた。突き出た刃を確認して、水銀燈は笑った。

「貴方の障壁は確かに防御能力が高いわあ。けど、その防御範囲は、あくまで体を覆える地上だけ……地下は範囲外……！」

地下が防御の穴だと睨み、伸縮自在の刀身を床に突き刺して、障壁の隙を掻い潜ったのだ。

伸ばした刃は、プログラム内部にある核を正確に貫いていた。鋭い魔力探知で、核の位置は把握出来ていた。後は、地下に障壁が張られていなければ破壊出来る。

そして、水銀燈は賭けに勝った。

「おやすみなさい、壊れた子……！」
ジャンク

水銀燈の眩きを合図に、核を破壊されたプログラムの巨体が崩れ出した。その様は、積み木の城が崩れるようだった。巨大な怪物は、数秒で高い瓦礫の山に変わってしまった。

防衛プログラムを生み出す元凶のプログラム。

ソレの消滅を見届けた水銀燈は、ふう、と息を一つついた。

ふと後ろを振り返れば、床に倒れているリンは意識を失っていた。体力を限界まで奪われ、途中で気を失ったようだ。失った体力を取り戻すように、穏やか、とは言えないイビキをかいて眠っている。彼の寝顔を見て、水銀燈は短く笑った。

＊

水銀燈とリンは、無事に外に出た。リインフォースの体内から出たリンの体は、元の大きさに戻った。
テリトリ

眠っているリンを見て、リインフォースが心配して尋ねてきた。水銀燈が中で起こった経緯も加えて説明すると、安堵の溜め息をついた。

「そうか……よかった。しかし、にわかには信じがたいな。私の中から、闇が完成に消えているのは……」

リインフォースの言う闇とは、元凶のプログラムの事だろう。

「だが、自分の体だからこそ解る。私の中に巣食っていた気持ちの

悪いモノが、無くなっている」

自分の胸に手を当て、語るリインフォースの顔は、まるで憑き物が落ちたような晴れ晴れとした表情をしていた。完全に諦めていた分、喜びの気持ちが大きいのだろう。

不意に、水銀燈が口を開いた。あの意地悪そうな笑顔で。

「それにしても、皮肉な話ねえ」

「何？」

「だって、そうでしょう？ 貴女のマスターのお友達は、マスターを助ける為に必死に頑張った。長く知り合った訳でも無い、赤の他人なのにねえ……うふふ、偉い偉い。」

でも、貴女を助けようとはしなかった」

最後の一言に、リインフォースは動揺して顔が強張った。

リインフォースの消滅は、本人が申し出た案だ。それを、なのは達が子供ながらに悩んだ末に受け入れ、実行しようとした。気持ちの整理がつかず、今はまだ公園に姿を現していないが、なのは達が先に着いていたなら消滅の儀式が行われ、リインフォースはこの世から消えていただろう。

リインフォースの動揺に構わず、水銀燈は続ける。

「可哀想に……マスターは助けたのに、マスターの部下である貴女の事は救おうともしない。貴女が消滅の話を持ち掛けて、あの子達はソレを受けた。」

リインフォース……どうしてあの子達が、貴女の消滅案を受けたと思う？ それはね、貴女はマスターと違って、もう助からないと思ったからよお。助からないと判断すれば、簡単に切り捨てる……薄情な子達ねえ。それが人間よお。

でも、結果的に貴女は死ななかった。貴女を助けたのは、安い友

情を掲げるあの子達じゃなく、今日さっき出会ったばかりの、ココ
で暢気に寝てる人間^{おばさん}」

雪の地面に倒れて寒い中で寝ているリンを見下ろして、「皮肉よねえ」と嫌味ったらしく水銀燈は呟いた。

黙って話を聞いていたリインフォースは、水銀燈を睨み付けた。確かに、なのは達は他の救済方法を探そうとせず、消滅案を選んだ。しかし、ソレは元はと言えばリインフォースが自ら提案した事であり、なのは達も苦渋の選択だった。だから、助けてもらった恩はあるが、まるでなのは達を悪者みたいに言う水銀燈を許せなかった。しかし、返す言葉が出てこない。見つからない。感情任せの言い返しでは、水銀燈は簡単にはね除けるだろう。どう反論すればいいか悩むリインフォースは、先程の彼女の台詞から、反撃の言葉を見つけた。

「そうだな。と言う事は、お前もその人間に救われた事になる」
「何ですって？」

水銀燈の顔から薄笑みが消え、目を細めて睨んできた。

「自分でも言っていただろう？ 『貴女を助けたのは、ココで寝ている暢気な人間』だと。そうだ。私は彼に助けられた。それはつまり、お前も彼に助けられた、と言う事ではないのか？」

今度は水銀燈の顔が強張った。

リインフォースの指摘通り、今回は水銀燈一人では解決出来なかった。途中から介入したリンと契約して、本来の力を取り戻してプログラムを破壊したのだ。

嫌味を嫌味で返す形になって、リインフォースは意地悪く笑い、水銀燈は悔しそうに歯を食いしばった。

「言ってくれるじゃない」

「否定はしないのだな」

「うるさいわね！」

声を荒げた水銀燈は、寝ているリンの足を掴み上げ、リインフォースに背中を向けた。

「これ以上、おばかさんの相手なんかしてられないわあ。……ああ、言い忘れるところだった。私達の事は他言無用にしなさい。別に組織からの賞やらお礼なんて、いらないからあ」

ズルズルと睡眠中のリンを引き摺り、水銀燈は去っていく。

「おいっ！ もう少し丁寧に運んでやれ！」

慌てて声をかけたが、水銀燈は聞く耳を持たず、公園から出ていった。

一人残されたリインフォースは、何だか気が抜けて苦笑した。

「ありがとう」

二人が去った後を見つめて、リインフォースは礼を言った。

＊

後日。

リインフォースの中にあった元凶のプログラムが完全消滅した事

で、長きに渡った『闇の書事件』が解決した事が、時空管理局の本局に報告された。

これまで、何人何十人もの犠牲を出してきた『闇の書事件』の解決は、しばらく局内で話題となった。その事件解決の貢献者が、まだ小学生の魔法少女だと言うのだから、無理もない。ただ、その話題に水銀燈とリンは出てこなかった。リインフォースは言われた通りに、二人の事は秘密にしたのだ。主であるはやてにも秘密と言うのは、些か心苦しかったが、二人にも事情がある事を察しての秘密だった。

しかし、二人の存在を知る者が、局内に居た。本局の一室で、一人の局員が作業をしていた。デスクに座り、硝子板のような薄いモニターを目の前に展開させ、映っている映像を見ている。

「フフ……廃棄処分されたハズの『魔導人形』^{ガラクタ}と、何の取り柄もない『人間』^{クス}……なかなか面白い組み合わせね」

興味深そうに眺める画面に映っていたのは、公園を出ていく水銀燈と引き摺られてるリンの姿だった。

二人の映像を見ているのは、女性局員だった。

「近い内に、私もそっちに行くから、縁があったら会いましょう。そして出来れば、命のやり取り……殺し合いをしましょう……！」

女性局員は、下品で不気味な舌舐めずりをした。

おやすみなさい、壊れた子（後書き）

感想お待ちしています。

おばかさあん（前書き）

事件が解決した、その日の話です。

おばかさあん

目が覚めると、灰色の空が広がり、沢山の白い点が降っていた。空から降ってくる白い点が、雪だと気付くのに少々時間を消費した。寝起きのリンは、脳が半覚醒の状態だった。

顔に降り積もった雪を払い、頭を左右に振った時だった。

「あ、目が覚めたんですね」

いつの間にか、彼の前に一人の女性が立っていた。

見た瞬間、リンはドキツとした。自分がベンチに座ってる事に気付き、慌てて姿勢を直す。

彼の前に立っているのは、美しい女だった。艶のある長い黒髪、凛とした顔つきながら柔らかい物腰を感じさせられ、これで着物でも着ていれば完全に大和撫子のイメージに合う。

服装は、清潔感のある上下真っ白の制服で、黒のタイツを履いている。

年齢は十八か十七歳の高校生ぐらいと思われるが、落ち着いた雰囲気、困気のせいか、随分大人っぽく見える。例えるなら、有能な美人秘書と言ったところか。

半ば呆然としてるリンに、美少女は礼儀正しく一礼した。

「初めまして。私、わたくし改運屋を営んでおります、もりやまはるか森山春香と申します」

「あ、ど、どうも。初めまして」

慌ててリンは、自分も立ち上がって頭を下げた。美少女を立たせて、自分だけ座って対応するのは失礼に思えたのだ。

照れ隠しみたいに頭を掻いたところで、ふとリンは気付いた。

「あの……今、改運屋って……」

「はい。私、改運屋の社長をやらせていただいています」

「じゃ……!？」

衝撃の事実を知って、リンは目を見開いた。

「じゃ、社長って……アレですよ？ ああ、会社で一番偉い人ですよ？」

「はい」

動揺しまくりのリンに、春香は穏やかな笑顔で対応する。

懐に手を入れて何か探る仕草を見ると、春香は一枚の紙を手渡した。リンは受け取り、紙を見る。手渡された紙は、名刺だった。会社名や名前、連絡先までちゃんと記されている。

マジでか？ とリンは顎が落ちそうだった。自分より年下と思われるの女の子が、会社の社長だなんて衝撃以外の何物でもない。『営んでおります』と言う言葉で察せない事も無いが、誰が十代の女の子が社長だなんて思うだろうか。

「遅くなりましたが、この度は改運屋に入社していただき、ありがとうございます」

非の打ち所の無い丁寧な動作で、春香は礼を言う。

「あつ、いえ……！ その、こちらこそ……！」

つられるように、リンも頭を下げた。何だかデジャヴを感じた。それから春香は、顔から笑顔を消して真剣な表情を作った。向き合っているリンが緊張感を抱くと、春香は口を開いた。

「入社してすぐに危険な仕事をさせてしまい、申し訳ありませんでした。貴方が今後、改運屋でやっていけるか見極める、謂わば短期の試用期間だったのです。命を落としそうになった時は、即座に現場から転移させるつもりでした。それでも、何の説明も無しに危険な目に遭わせた事を、お詫びします」

「あ、いや、そんな……」

謝罪に頭を下げる春香に、リンは困惑した。

確かに、いきなり自分の部屋から寒い外に放り出され、水銀燈に足蹴にされ、ロボット怪獣と闘う目に遭ったり（実際に闘ったのは水銀燈だが）、訳の解らぬ内に命の危機に陥った。だが、不思議と春香に対する怒りは無かった。春香本人に直接何かされた訳じゃないし、結果的には助かり、いまいち現実味が無いので、「まあいいか」と軽い気持ちなのが本心だ。

それよりも、夢オチじゃなかったのか、と言う感想が心中の大部分を占めていた。

「別に恨んでなんかいませんから、頭を上げて下さい」

「ありがとうございます。リンさんは、優しいんですね」

リンに促され、頭を上げた春香はニツコリと微笑む。

彼女の笑顔を見て、リンは顔が熱くなるのを感じた。鏡で見れば、きつと赤くなってる自分の顔が映ってるだろう。

恥ずかしさを誤魔化すように、リンは先程思い出した事を訊いた。

「あの……水銀燈は？」

「ああ、彼女でしたら、多分近くを飛んでるのでしょう。私が、この公園に着いた時には居ませんでしたから」

そうですか、とリンは呟いた。

プログラムとの戦闘が終わる寸前で、リンは体力の限界を迎えて意識を失った。それから、この小さな公園で目覚めるまで、ずっと眠っていた。ココまで運んでくれたのは、水銀燈で間違いないだろう。その前も、プログラムの攻撃から護ってくれた礼を言っていない。礼を言えなかった後悔の念、急に居なくなった寂しさがリンの心中にあった。

謝罪を終えた春香は、少し低い声で言った。

「リンさん。今回の件の成功報酬をお渡しする前に、最終的な意思確認をさせていただきます。強制は致しません。貴方は、このまま改運屋を続けますか？」

問われたリンは、すぐに返答出来なかった。

正直、あんな恐くて危険な目に遭うのは御免だ。一時は自殺志願者だったが、他者に殺される事は望んでない。

だが、しかし、とリンは思う。もし、ココで断れば元の自堕落な、ある意味平和な生活に戻るだろう。その代わり、もう二度と彼女――水銀燈には逢えないかもしれない。改運屋を辞めると言う事は、水銀燈との交流も断つようなものだ。

リンは、水銀燈との繋がりを選んだ。

「えっと、続けます」

「結構です」

春香は満足そうな笑顔で頷くと、足元に置いていたジュラルミンケースを持ち上げた。

ずっと足元に置かれてあったのだが、春香にばかり気を取られてリンは全く気付いてなかった。

「お受け取りください」

「はあ、ありがとうございます」

礼を言って受け取った瞬間、ケースを持つリンの腕が、ガクンツと下がった。

「んなっ……!?!」

重い。

ケースの重さが、思っていたよりも重かった。何とか落下は防いだが、たまらずリンは地面に置いた。

屈んだ体勢から、春香を見上げる。

「あの……中、開けてもいいですか……?」

「どうぞ」

気を悪くした様子も無く、相変わらず春香は穏やかな笑顔で答えた。

許可を得たリンは、少々緊張した様子でケースの蓋を開けた。目に飛び込んできた中身は、ギッシリと詰まった大量の札束だった。瞬間、リンは乱暴に蓋を閉じた。

何かの見間違いないだろうか、と思い、もう一度覗いてみる。中身はやはり、札束だった。また蓋を閉め、取り乱して春香に尋ねる。

「ああ……あの、あの……コ、コレ、幾らくらい入ってるんですか……?」

「ケースの中身の金額は、一億になります」

「いっ……!?!? お……!?!?」

サラリと口から出たぶっ飛んだ金額に、リンは驚愕動転して開い

た口が塞がらなかった。もしかしたら、今日一番の驚きかもしれない。

命懸けの戦闘からの生還で、しかもキッチリと依頼も果たしたので、当然と言えば当然の金額かもしれない。だが、ほんの数時間前まで平凡な世界で生きてきたリンにとって、一億なんて大金は実際に拝んだ事が無い、現実味の無い大金だった。以前に彼が手にした現金の最高金額は、五十万ほど。目の前の大金に比べたら、端金^{はしたかね}だ。

「では、私はこれで失礼します。

リンさん。仕事も勿論ですが、これから水銀燈をよろしく願います」

「え……？ あ、は、はあ……」

一億と言う目も眩むような大金を前にして、リンは気の無い返事をした。

最後まで礼儀正しい姿勢で、春香は公園を去っていった。

残されたリンは、啞然とした顔で大金の詰まったケースを見る。

コレどうすんだよ？ と考え込んでいた時だった。

「話は終わったあ？」

「おおおうっ!？」

突然、何の前触れも無く後ろから声をかけられ、リンは大声を上げて振り返った。普段なら、急に声をかけられても、ここまでは驚かない。

しかし、大金を前にしている今は、過敏に過剰に反応してしまう。叫びを上げたリンの前に居たのは、宙に浮いた水銀燈だった。

「不本意だけど、契約を結んだから私は貴方と一緒に行動するわあ。けど、勘違いしちゃダメよお？ 主はこの水銀燈で、貴方はこの

水銀燈の忠実な下僕……！ 分かったあ？」

「は、はい……分かりました」

いや、主従関係逆じゃね？ と心中でツツコミはしたが、口に出すと何をされるか分からないので諦めて従った。

ああ、そうだ、とリンは言い忘れていた事を思い出す。

「あの、水銀燈……」

「何かしらあ？」

「その……リインフォースさんの中では、あの……護ってくれてありがとう。それと、ココまで運んでくれた事も……」

「別に……お礼なんていらないわあ」

リンの感謝の言葉に対して、水銀燈は素っ気ない返事をした。

この反応は、まあ予想はしていた。短い付き合いだが、水銀燈と接して、大体の性格は知ったつもりだ。なので、素っ気ないからと言って別に落ち込みはしなかった。

「それじゃあ、帰るわよお」

「え？ 帰るってどこに？」

「おぼかさあん。貴方の家に決まってるでしょう？」

当然のように言う水銀燈に、思わずリンは苦笑した。

コレは予想外だった。

俺の家に泊まる気か？ 家族に何て説明すればいいんだ？ と様々な言葉が頭を過った。

まあ、そういった問題は後で考えよう。

金の入ったジュラルミンケースを持って、リンは訊いた。

「水銀燈……俺、何か役に立ったかな……？」

「なあに？　よく出来ましたあって誉めて欲しいのかしらあ？」

相変わらず水銀燈の声は、嫌味の混じった猫なで声だ。

しかし、今は癪に障ったりしない。アレが彼女の味なのだ。

「別に……」

さっきのお返しと言う訳ではないが、リンも素っ気ない返事をした。

内心では、僅かだが誉め言葉を期待していた。無いだろうな、と思いつつも、もしかしたら、なんて淡い期待を抱いてしまう。

トボトボと歩き出すリンに水銀燈が寄ってきて、耳元で言った。

「可哀想な子ねえ。何の役にも立たず、誰からも愛されない、独りなおばかさん。

でも安心しなさい。これからは、この水銀燈が貴方の主となって、こき使ってあげる」

水銀燈の吐息が、耳にかかってくすぐったい。

氣遣おうとしない、寧ろ苛めるような水銀燈の言葉を聞いて、しかしリンは嬉しく思った。受け取り方次第では、「自分^{リン}を必要としている」と解釈する事も出来るからだ。

ソレは、自分に都合の良い解釈かもしれない。

それでも構わなかった。水銀燈の言葉で、リンは少し救われた。

「ありがとう」

リンは明るい表情で、水銀燈に礼を言った。

まだ耳元に居る水銀燈は、まさか礼を言われるとは思ってなかったように、驚いていた。予想外の返事に目を見開いていたが、つま

らなそうに顔を逸らした。

「……おばかさぁん」

いつの間にか雪は止み、雲の隙間から明るい陽の光が差し込み、二人を照らしていた。

おばかさん（後書き）

第一章終了です。

感想お待ちしています。

馬鹿って言った方が馬鹿なんだぞ

「疲れたあゝ！」

自分の部屋に入ったリンは、疲労感のこもった深い溜め息をついた。

大金の詰まった重いジュラルミンケースを床に置き、自分もドアを背にして座り込む。

すると、腕に抱えてるモノが喋った。

「もういいかしらあ？」

「ああ。いいよ、水銀燈」

リンの腕に抱えられていたのは、水銀燈だった。

彼の返事を聞いた水銀燈は、腕の中から離れ、宙を飛んで近くのベッドの上に腰を下ろした。ふう、と息を一つ吐き、紅い目で室内を一通り見回す。

そして感想を一言。

「狭いわねえ」

「正直な感想ありがとう」

今のリンには、水銀燈に反論する気力すら無かった。

ここまで辿り着くのに、大変な苦勞をしてきたのだ。

まず、帰り道だが、幸いにも目覚めた公園は駅の近くであり、その上、地元までそう遠くない距離で迷う事は無かった。ソコはいい問題は、その道中だった。何せ、一億なんて未曾有の大金が詰まったケースを持ってるのだから、周りの目が気になって気が気じゃない。オマケに、水銀燈まで抱えてるのだから、気になるどころか、

視線が痛かった。道中、水銀燈には黙ってもらい、人形と言う事で持ち歩く事にしたのだ。黙ってジツとしていれば、水銀燈は精巧で綺麗な西洋人形に見えなくもない。痛車いたしゃに乗ってる人やコスプレイヤーは、こんな気持ちなのかな？と周囲の痛い視線を受けながら、リンは思った。他に方法あっただろう、と後に後悔するが、既に遅かった。

電車で地元に着いて、徒歩で家に向かった。

そして、家に着いたら着いたで、面倒な事態になった。急に部屋から姿を消したので、両親が問い詰めてきたのだ。疲労が溜まっているリンにとって、両親からの質問はウザい以外の何物でも無かった。適当に答えて、とっとと部屋で休みたいと言うのが、リンの本音だ。

無い頭を使い、リンは考えていた理由を両親に話した。黙って出掛けたのは、単に挨拶の声が小さく、両親の耳に届かなかっただけ。出掛けた理由は、内緒で買った宝くじが当たったので、その金を受け取るため。ジュラルミンケースの中身は、一億円。腕に抱えてる人形（水銀燈）は、趣味で買った物。我ながら無茶苦茶だと思ったが、他に上手い理由が思い付かなかった。

しかし、半信半疑ながら、一応は両親を納得させる事は出来た。重い足取りで階段を上がり、二階にある自分の部屋に入り、現在に至る。

「あゝ……マジダリー」

気だるげな声を出すリンは、立ち上がる事すら出来なかった。

水銀燈への魔力供給、重いジュラルミンケースを持って徒歩で帰ってきた事で、リンはもう疲れきっていた。

ベッドにダイブしたいが、立てないので座ってるしかない。

肉体的にも精神的にも、本当にリンは疲れていた。たった一日で、色々あり過ぎた。平凡平和な世界から一転、魔法が存在し、化物

と闘うファンタジーな非日常な世界に身を突っ込んだ。

疲れてボーッとしてるリンの前で、水銀燈は宙に浮いて本棚の前に移動した。退屈しのぎになる物を、探してるのだろう。目の前の本棚には、漫画がズラリと隙間無く並んでいた。

「漫画ばかりねえ」

「漫画知ってるんですか？」

「この世界の文化は、大体把握してるわあ」

答えながら水銀燈は、一冊の漫画を手に取り、捲って読み始めた。どうやら、この世界の文字もマスターしているようだ。

漫画に目を落としたまま、水銀燈が言う。

「くだらない物が好きねえ」

「まあ、物の価値観は人それぞれだから」

好きな漫画を悪く言われても、リンは怒らず冷静に返した。

誰だって、好きな物があれば嫌いな物がある。今回の場合、漫画は水銀燈にとってつまらない物、リンにとって楽しい娯楽品と言う価値観の違いであり、別に怒る程の事ではない。

それに、ただでさえ疲れてるのに、つまらない事で一々怒って無駄な疲労を増やしたくなかった、と言うのもある。

休息を得たリンは、ふと訊くべき事を思い出した。

「水銀燈」

「なあに？」

気の無い返事を返す水銀燈は、別の漫画を手にしていた。

漫画気に入ったの？ と尋ねたい衝動を押さえ、リンは本題を口にする。

「改運屋って、どんな組織なの？」

リンの問いに、水銀燈は漫画から目を離して、ポカンとなった。彼女らしくない、間の抜けた顔だ。

「今更そんな事訊くなんて、馬鹿じゃないのお？」

「いや、気にはなってたんだよ？　ただ……ホラ、訳の解らない展開の連続で、正直質問どころじゃなかったし、訊くタイミングも逃したし、ぶっちゃけ忘れてたし……」

リンは目を剃らし、頭を掻いた。

あんな状況じゃなくとも、たまにあるのだ。重要な事を聞き逃して、後で聞こうと思ってそのまま忘れ、解らないままにしてしまう事が。以前の仕事でも、ソレが原因で怒られた事があった。

呆れのこもった溜め息をつき、水銀燈は答えた。

「改運屋は、『世界』からの依頼を受けて解決する組織よお」

「『世界』からの、依頼……？」

リンは、怪訝そうに眉根にシワを寄せた。

二冊目の漫画を本棚に戻し、三冊目を取って水銀燈は続ける。

「私や人間のような、目に見える姿形は無いけど、世界には意思があるのよお。その世界の意味は、悲劇喜劇に問わず、定められた運命を敏感に察知するの。その運命の中には、世界の意味にとって都合の悪いものとかがあって、改運屋は、世界の意味から依頼を受けて、その運命を変える為に動いてるのよお。本来介入しないハズのイレギュラーが介入すれば、運命を変えられると考えたのねえ。

依頼の内容は、『世界に悪影響を与える者の消去』、逆に『死な

すべきでない者の死の回避』とかもあるわあ。後者の方は、世界の意思の感情的な理由が主ねえ。可哀想だからとか、可愛いから死なせたくなйтとか……そんなところかしらあ」

「はあ……」

話を聞いたリンは、妙に拍子抜けした気分になった。

世界の意味、なんて壮大なモノが出てきたのに、依頼理由が本当に感情的で、変に思えた。もっと、「世界の危機が迫っているから阻止しろ」とか、世界の意味らしい使命的な理由だと思っていた。だが、どうやら世界の意味とやらは、人間味臭い存在のようだ。例えて言うなら、アニメを見て展開に不満を抱き、二次創作で結果を変えようとする奴みたいな感じだ。

「まあ、春香は純粹に人助けの為に、改運屋で依頼を受けてるようだけど……」

「ああ、あの人……」

春香の顔を思い出しながら、リンは何となくホッとした。

世界の意味みたいな、感情的理由で動いてる訳じゃないと安心したからだ。別に、感情的理由が悪いと言うのではない。ただ、世界なんて壮大さに比べて、少々物足りない感じがしたのである。

納得して、リンは二つ目の質問をした。

「じゃあ、この報酬の金は、どこから調達したの？ まさか、世界から受け取ったなんて言わないよね？」

「そんな訳無いでしょう、おばかさん」

鼻で笑い、水銀燈は新しい漫画を取る。

どうでもいいが、出会ってから水銀燈は容赦無く「おばかさん」と言ってくる。今時、馬鹿と言われたくらいで怒りはしないが、こ

これまで「おばかさん」を何回も言われると、いつそ清々しいものだ。

「聞いてないのかしらあ？ 春香、大富豪のお嬢さんなのよお」

「大富豪の娘っ!？」

驚いてリンは、目を丸くした。

言われてみれば確かに、春香が着ていた服は高そうな代物に思える。見た目だけでなく、素行や言葉遣いも上品だった。それに金持ちなら、一億なんて巨額の報酬を用意出来たのにも頷ける。庶民からしたら大金だが、本当の金持ちからしたら一億も大した金ではない。巨額の財産の、ほんの一部に過ぎないのだから。

そう考えると、自分はどうしてもない大物を相手に会話してたんだなあ、と思った。

「何か……スゲーな」

コレが、リンの精一杯の感想だった。

今更ながら、自分はどうしてもない世界に飛び込んでしまったようだ。水銀燈の言うように、今更だが。

少し間を空けて、リンは最後の質問をした。

「水銀燈……俺なんかで、いいの？」

「何の事かしらあ？」

「何の事って、パートナーだよパートナー。いや、水銀燈の言い方なら、下僕かな？ その相手が、俺なんかでいいの？」

水銀燈とリンは、主従関係の契約を結んでいる。

人間と契約を結ぶことで、水銀燈は繋がりを通じて契約者の生命エネルギーを魔力に変換して得る事で、本来の実力を発揮する。

契約の中身を理解して、冷静になって考えてみたリンは、自分で

は不適合者ではないかと思った。何かスポーツをやってる訳ではないので、体力は人並みだ。そんな自分と契約してるより、もっと体力のある人間と契約した方が合理的である。

リン個人としては、水銀燈と一緒に居たいと言うのが本心だ。

しかし、水銀燈は解らない。契約だって破棄出来るだろうし、彼女に相応しいパートナーが他にいるかもしれない。

質問を受けた水銀燈は、漫画から目を離し、振り向いた。

その瞬間、リンは思わず背筋を伸ばした。何か来る、と思ったのだ。

何故なら、水銀燈が意地悪な笑みを浮かべていたからだ。

「別に、私は貴方じゃなくても構わないわよお。でも、それじゃあ貴方が困るでしょう？」

「な、何がですか？」

クスリと笑い、水銀燈は言う。

「貴方、私が好きなんでしょう？」

「がっ……！？」

聞いた瞬間、リンの顔は急速に熱を帯びて赤くなった。

頭の中では、どさくさに紛れて水銀燈に告白した事を思い出す。

告白に繋がるような話でも無かったのに、場違いにも口から「好き」だと出てしまった。

しかも告白の後、契約の儀式とは言え、キスまでした。リンにとって、ファーストキスでもあった。

これが顔を赤くしないでいられるか。

「あっ、いや……アレは、その……何て言うか……あああああ！」

猛烈な恥ずかしさに襲われ、リンは俯いて頭を掻きむしった。とてもじゃないが、水銀燈の顔を直視出来ない。早鐘の心臓も、簡単には収まりそうに無い感じた。

リンの反応を見て、水銀燈は可笑しそうに笑う。

「うふふ。貴方のようなおばかさんと居ると、退屈しのぎにはなりそうねえ」

答えにならない答えを言って、水銀燈は再び漫画読みに戻った。僅かに顔を上げたリンは、悔しくて歯を食いしばった。

からかわれた。水銀燈は、明らかに自分をからかっている。馬鹿と言われるのは慣れているが、それとこれとは別だ。

何とか仕返しをしたいが、大して頭の良くないリンは苦悩した。漫画を読む水銀燈を見て、リンは絞り出すように言った。

「……漫画気に入ってるじゃん」

「なっ……!?!」

弾かれたように振り向いた水銀燈は、キッとリンを睨んだ。リンの仕返しは、思った以上に効果を發揮した。

「ほ、他に何もないから、仕方なくよ!」

「はいはい。水銀燈も子供だねえ」

初めて狼狽える水銀燈を見て、リンは一矢報いたと内心で快哉かいさいを上げた。

その喜びが、顔に表れてたのだろう。不機嫌そうな水銀燈の顔が、みるみる赤くなっていった。子供扱いされたのが、よほど悔しかったのだろう。

「貴方こそ、いい加減に漫画を卒業しなさい！ そんな事だから、ガキっぽい上に馬鹿なのよ！」

おばかさん、おばかさん！ 本当におばかさあん！」

「馬鹿って言った方が馬鹿なんだぞ、バーカ！ あっ、俺も馬鹿じゃない！」

リンは、久し振りに家で声を上げた。

馬鹿って言った方が馬鹿なんだぞ（後書き）

感想お待ちします。

人物紹介よお

リン

性別は男で、一応本作品の主人公。大卒で就職したものの、職場の同僚からのキツイ叱りに耐えられず、退職。以降は、就活をせずに家でダラダラとした自堕落な生活を過ごしていた青年。パートナ―である水銀燈に一目惚れ。

自分の部屋で昼寝をしていたところに、夢の中で改運屋の勧誘を受け、軽い気持ちで入社する。寝ている間に転移魔法の類で移動させられ、起きて早々に水銀燈と依頼をこなす事になった。その際に、水銀燈と主従契約を結んだ。

見た目は、凡人を絵に描いたような凡人。基本的には暢気で面倒臭がりな性格で、臆病な面もある。金は欲しいクセに、働く意欲は欠片も無い。一言で簡潔に表すなら、怠惰なダメ人間。

これと言った目立つ特技も能力も才能も持ち合わせておらず、物凄く地味な主人公にあるまじき主人公。今後の活躍があるのか、正直怪しいところである。

水銀燈

性別は女で、本作品のもう一人の主人公でありヒロイン。相手を小馬鹿にしたような猫なで声で、「おばかさあん」が口癖であり、主人公のリンの事もそう呼んでいる。

長い銀髪と、逆十字デザインの白と黒のドレスが特徴。着ているドレスも魔力で編まれているので、自力で修復する事が可能である。その正体は人間ではなく、過去に時空管理局の技術開発部で生み出されたデバイスである。同じ人型では、魔導師と融合して能力を向上させる『ユニゾンデバイス』が在る。だが、水銀燈はソレとは別種であり、魔法を行使出来ない一般局員専用として開発されたデ

バイスなのだ。契約した相手の生命エネルギーを魔力に変換する事で、自分の力として得る事で行動する。一般局員も職場に居ながら現場捜査に協力出来るようにと計画されたのだが、魔力の消費が激しく、契約相手の体力を大量に奪い、使う魔法次第では命の危険がある欠点が見つかり、結局改善出来ぬまま中止となり、水銀燈も『失敗作』として破棄されてしまった。

自分を『失敗作』と否定した人間を嫌っており、改運屋に入ってからはずっと一人で依頼をこなしてきた。リインフォースの体内で、プログラム相手に苦戦して窮地に陥ったところをリンに助けられる。自分を好きと場違いにも告白してきたリンに興味を抱いたのか、ついに彼と契約して契約者を得る。リインフォースの件が解決した後は、リンとの契約を続けてコンビを組み、彼と同居する事に。

両肩の黒羽をナイフのように飛ばしたり、龍の形に変えたり、掌から魔力の塊を光線のように発射する砲撃魔法を駆使したりと多様な攻撃方法を持っている。他にも、刀身の無い剣型『アームドデバイス』も所有している。自身の魔力を流して、伸縮自在の魔力の刀身で攻撃する等、遠距離、中距離、近距離全ての攻撃に通じている。何気に万能型のデバイスだが、契約者の体力の限界と言う致命的な欠点はいまだに改善されていない。

日本の漫画を気に入っている様子だが、本人は否定。
リンよりは主人公らしい主人公と言えるだろう。

ふふ……良い子ねえ

リンは、金が欲しかった。

ある会社に入社して、働いて金を稼いだ。一般庶民にとって、途方もない金額が手に入った。

ただ、あまりに金額が大き過ぎるので、リンは使い道に困った。とりあえず、今までの学費やら何やら親に世話になった分を払い、残りは自分の口座に預けた。

財布の中身は、五、六万程だ。庶民の自分には、これ位がちょうどいい。金を稼いだので、リンは夕飯を買いにスーパーに訪れた。自分の分は勿論だが、仕事で世話になった相棒の分も忘れない。食の好みが解らなかったので、適当に買い物カゴの中に入れて、レジで支払いを済ませた。

用事を済ませたリンは、気だるげな感じで玄関を開け、家に帰宅した。靴を脱いで、階段を上がって自分の部屋に向かう。

「遅かったわねえ」

猫なで声で迎えたのは、ベッドに腰掛けてる水銀燈だった。手には漫画を持ち、視線を開かれたページに落としている。

本人は、「他に何もないから仕方なく」と言っていたが、誰がどう見ても、ハマっている様子だ。

「ただいま」

挨拶をして、リンは入室して扉を閉めた。

チラッと時計を見れば、もう七時を回っていた。ふむ、確かに遅い時間だ。

食べ物や飲み物が詰まった袋を片手に、リンは机の前に歩み寄っ

た。

「スーパーで食べ物買ってきたけど、何食べる？」

「いないわぁ」

「え？」

机に荷物を置いて、リンは水銀燈に顔を向けた。

水銀燈の方は、漫画に目を落としたまま見向きもしない。

「私は人間じゃないから、別に食べ物なんて必要無いわぁ」

「マジで？ それなら最初に言ってくれよう！」

早くも無駄遣いをしてしまい、リンは頭を抱えた。

食べ物好き嫌いどころか、人間でない水銀燈は『食事』自体を必要としない事が判明した。出来る事なら、買い物前に知っておきたかった。

あからさまにガツカリするリンに、水銀燈は鼻を鳴らした。

「ふんっ。買い物に行くなんて聞いてないし、貴方が勝手に早とちりしたんでしょう？ おばかさぁん」

「そりゃまあ、確かに……」

外出前に確認をしなかった自分にも責任があり、苦笑いでリンは頭を掻いた。

それと同時に、とんだ無駄足だったな、と溜め息をついた。さすがのリンも、袋一杯の食べ物を全て食べきる事は出来ない。幾つか取り出して、残りは一階の冷蔵庫にでもしまっておこうと考えた。

おにぎり等の今日までが賞味期限なのとペットボトルのお茶を取り出し、残った物を冷蔵庫にしまに行こうとした時だった。

「でも、飲み物はちようだあい」
「え？」

漫画から顔を上げ、水銀燈が飲み物を要求してきた。
食べ物には要らないが、水分は摂取するらしい。よく解らない女だ。
ちなみに、リンは彼女がデバイスである事を知らない。
袋を机に置いて、中身を漁りながらリンは訊いた。

「で？ 何が飲みたいの？ 一応、一通り買ってあるけど」
「コーヒー・ブラックちようだあい」

この時、初めてリンは水銀燈に共感した。
彼も、コーヒーはブラック派だった。

＊

「貴方はいいのお？」

缶コーヒーのブラックを飲み終えた水銀燈が、不意に尋ねた。

「何が？」

尋ねられたリンはと言うと、椅子に座って買ってきたおにぎりを
食べていた。

机に残ってるのは、具が鮭とハンバーグのおにぎりだ。リンは、
好きな食べ物はとっておいて、最後に食べるタイプなのだ。ハンバ
ーグが具のおにぎりは、最近知って以来気に入っている。

口の中で数回咀嚼して、ペットボトルに入ったお茶を飲んで、喉

に流し込む。

タイミングをはかって、また水銀燈は訊いた。

「下で、一緒に食べなくていいのかしらあ？」

部屋の真下では、リン以外の家族が集まって夕飯を食べながら談笑している。時折、笑い声が下から聞こえてくる。

水銀燈の問いに、リンは微妙な笑みで答えた。

「別にいいよ」

「どうして？」

「仲悪いからだよ。それに、水銀燈も見たでしょう？ 俺が一億見せた時の親の顔を……」

人間は、損得勘定で生きる生き物だ。自分にとって得にならない人には、冷たい態度を取る。それは、親子も例外ではない。金を作らないと分かれば、息子でも邪険に扱われる。

最初に帰ってきた時、リンは一億を両親に見せた。すると、それまで冷たかった両親の態度がコロッと変わった。

ソレを見てリンは、虚しくなった。就職した時は優しいが、辞めて金を作れなくなったら掌返しをする。そして、大金を引っ提げて帰ってくれば、一緒にご飯を食べようと優しく接してくる。

結局、金ですか。

「今更、仲良く一緒に食べる気なんて無いよ」

寂しい笑顔で食事を続けるリンを、水銀燈は黙って見ていた。

*

家族が寝静まったのを確認してから、リンは水銀燈を連れて一階に下りた。

風呂に入る為だ。リンは夕飯を済ませた後で風呂に入ったが、さすがに水銀燈も一緒に入れる事は出来なかった。風呂場に行くまでには家族の目があるし、水銀燈を入れる場面を見られたら間違いなく“変態”のレッテルを貼られてしまう。それにリン自身、人間ではないとは言え、一応女の子である水銀燈と一緒にいるなんて無理だった。

寝ている家族を起こさないように、足音を殺して階段を静かに下りていく。

こういう時、魔法は便利だ。飛行魔法で宙に浮いてる水銀燈は、足音を鳴らす心配が無い。多分、泥棒辺りが一番欲しがりそうな能力だろう。

無事に一階に辿り着き、居間の明かりを点ける。風呂場は、居間の隣にある台所の隣にあるのだ。家族は、別の部屋で寝ている。

「じゃあ、俺はココに居るから」

そう言ってリンは、居間の床に座り込んだ。家族が起きてこないか、見張りも兼ねている。

「そう」

短く呟き、おもむろに水銀燈はドレスを脱ぎ出した。その瞬間、リンは顔を赤くさせて取り乱した。

「ちよっ……待っ……！ 何やってんの！？」

「うふふ。何って、お風呂に入るから、服を脱いでるのに決まって

るでしょう？」

リンの反応が面白いのか、小さく笑いを漏らして水銀燈は脱衣を進める。

水銀燈が脱衣の手を止める様子は無いので、慌ててリンは後ろを向いた。妙に色っぽい仕草だったので、心臓もドキドキと高鳴っている。夜で二人っきりと言う状況が、更に興奮を駆り立てる。

落ち着け。落ち着け、俺。

背を向けるリンは、必死に心中で呟きを繰り返して、気持ち落ち着かせようとした。

しかし、ソレはあっけなく破られた。

「うふふ。人形相手に興奮してるのかしらあ？」

「うわっ！」

いきなり目の前に、水銀燈の顔が現れてリンは驚き、後ろに後ずさった。

見れば水銀燈は、ドレスやブーツを脱ぎ終えて裸になっていた。

「おまつ……風呂場で脱げよっ……！」

恥ずかしくて直視出来ず、リンは顔を逸らした。

しかし、それでも興味はあり、水銀燈を横目でチラッと見た。黒かった水銀燈は、ドレスを脱いだ事で色が白に変色していた。真っ白な素肌を、惜し気も無く晒している。胸は控え目な感じで、下品ないやらしさは無い、スラリとした体型が上品な色香を漂わせている。これは、水銀燈の性格にも起因しているのだろう。

そして、彼女の身体で、普通の人とは違う点を見つけた。身体の関節部分が、球体関節仕組みになってるのだ。可動式のフィギュアの手足を思い浮かべていただければ、概ね間違いは無い。

まさしく人形の身体をした水銀燈は、美しかった。興奮を高めるリンだったが、しかし飛び付きたい衝動は無かった。何と言うか、汚したくない、高貴さある美しさで、普通の女とは美しさの種類が全然違う。

顔を真っ赤にさせたリンを見て、水銀燈はからかうような笑みを浮かべた。

「大丈夫？ 顔が真っ赤よお？」

「い、いいから！ 早く風呂入ってこいよ！」

向かいの部屋で寝てる家族を起こさない程度の大きさで、リンは声を上げた。

リンが顔を俯いてると、宙を移動する微かな音、次いで扉の開閉音が聞こえた。ゆっくり顔を上げて、周囲を見回す。水銀燈の姿は見えない。代わりに、風呂場からシャワーの音が聞こえてくる。やっと風呂場に入ったようだ。

リンは項垂れ、溜め息をついた。

「アイツ……絶対俺の反応見て楽しんでるよ」

この後、風呂上がりの濡れ姿の水銀燈を見て、またもリンが動揺したのは、言うまでもない。

＊

水銀燈の風呂を済ませ、さあ寝ようとリンは椅子に座った。怪訝に思った水銀燈が、首を傾げた。

「ベッドで寝なくていいのかしらあ？」

「いいよ。水銀燈使って」

疲れが溜まってるせいかな、いつもより眠気が強い。出来る事ならベッドで睡眠を取りたいが、水銀燈を除け者にする訳にはいかない。学生の頃は、よく講義中に居眠りをしたものだ。

「その代わり、電気は消しておいて……。じゃあ、おやすみ……」

消灯を水銀燈に任せ、椅子に深く腰掛け、リンは机に突っ伏した。今は厚着をしてるので、寒さには耐えられる。

薄れていく意識で、リンは思った。水銀燈と出会って、一億なんて大金を得た。

それで、自分は何か変わっただろうか？

多分、まだ何も変わってない。人間、そう簡単に変わるなら苦労はしない。

意識が途切れる寸前、別の思考に変わっていた。

残ったお金を、さて何に使おうか？

しかし考える間もなく、リンの意識は闇に落ちた。

「起きなさあい！」

「ん……」

リンを覚醒させたのは、耳元でかけられた水銀燈の声だった。甘い吐息がかかって、少しくすぐったかった。

眠い目を擦り、もたついた動きで体を起こした。ずっと額を乗せていた腕の部分が、赤くなって少し痺れを感じる。

「ん……何……？」

眠くて細い目で、傍に浮いてる水銀燈を見る。
水銀燈は、上から目線の高圧的な態度で言った。

「寒くて寝付けなから、私と一緒に寝なさい」
「え……？」

リンは、自分の耳を疑った。
まさか水銀燈の方から誘われるとは、思ってもみなかった。

「……いいの？」
「私が命令してるのよお。下僕の貴方は、主であるこの水銀燈の言う事をおとなしく聞けばいいのよお。解ったかしらあ？」

相変わらず、水銀燈は高い位置から物を言う。
しかし、だからと言って反論する気は無かった。面倒くさいし、
何より眠たい。

「はい……」
「ふふ……良い子ねえ」

短く答えると、水銀燈は満足げに笑った。

一体どういう風の吹き回しだろう、と思ったが、考えるのも億劫なのでやめた。些細な疑問なんて、どうでもいい。ベッドで眠れるのだから、文句も無い。それに、水銀燈と一緒に寝れるなら、寧ろラッキーと考えるべきだ。

大きな欠伸をかき、リンはベッドに寝転がった。
その隣に、水銀燈が横になった。仰向けのリンに背中を向けて、
言った。

「変な事したら、容赦しないわよお？」

「うん……」

そろそろ寝かせてください、とリンは心中で頼んだ。

「まあ、貴方にそんな度胸は無いでしょうけど……」

解ってるじゃないか、とリンは心中で相槌を打つ。

「じゃあ、おやすみ……」

返事は期待してなかった。

しかし、水銀燈なりの返事がきた。

「ふんっ……」

水銀燈の背中の中の温もりを感じながら、リンは眠りについた。
リンの長い一日は、ようやく終わった。

＊

リインフォース救済から数日後。

新たな依頼がやってくる。

今度の依頼は、ある親子の救済。

病魔に蝕まれた母親と、短い生涯を閉じた娘。

救済の手掛かりは、不老不死伝説が残る村。

そして——動き出す殺人局員。

シラス村へ、ようこそ！

「俺もやる……！ 今度こそ逃げないっ……！」

ふふ……良い子ねえ（後書き）

次回から、第二章開始です。

乳酸菌摂ったらあ？

リンフォースを救済してから、約二週間が過ぎた。

あれから、依頼の話は来ていない。水銀燈によれば、『世界の意思』からの依頼はそう頻繁に来るモノでは無いらしい。

ソレを聞いて、正直ホッとした。あんな危険なミッションを、普通の仕事と同じように毎回やるんじゃないかあ命が幾つあっても足りない。受け取った報酬も幾らか使ったが、まだまだ有り余っている。

大金を得たからと言って、リンの生活は劇的な変化を遂げたりはしなかった。ダイヤを買ったり、高級車を買ったりと別に派手な買い物はしていない。贅沢の仕方が、よく解らないのだ。それに、綺麗な石ころ等を買うより、普通に漫画を買って読む方がずっと有意義だ。物の価値観は人それぞれだが、何で石ころに高値を付け、買う人がいるのか、リンはいまだに理解出来なかった。

他に金の使い道を求め、リンはパチンコを始めた。店の中に入ると、煙草の匂いがした。一応、換気扇を回してはいるが、店内に蔓延した煙草の匂いを完全に消すまではいかなかった。リンは煙草が苦手だったが、我慢出来ない程では無かったので、席に着いた。

何列も並んだパチンコ台の内の一つを睨み、銀玉を発射し続ける。釘に当たりながら落ちていき、殆どが外れ穴へと吸い込まれていく。勿論、真ん中に設置されてるルーレットを回す穴にも入るが、肝心の数が揃わず当たりが出ない状態だった。

そして今も、リーチがかかったものの、真ん中の数字が外れてしまった。更に、銀玉も尽きた。

外れた瞬間、リンは頭を抱えた。

「あゝ！ くっそゝ！」

天井に向かって、悔しさを声に出して叫んだ。

「お遊びでいちいち怒ってたら、疲れるだけよお。乳酸菌摂ったらあ？」

彼の同伴者が、猫なで声で乳酸菌を勧めてきた。

リンの胸ポケットから、ミニサイズの水銀燈が顔を覗かせていた。体を小さくする事が出来る彼女は、リンと外出する際は、こうしてミニサイズで胸ポケットに入っている。

「……考えとく……」

苦い顔で水銀燈の勧めに答え、敗北したリンは店を出た。

結局、リンは五千円をパチンコで溶かした。しかし、一億近い大金を残している事を考えれば、大した痛手ではない。

「くっそ。良いとこまではいくんだけどなあ……外れ台だったかあ……」

とは言え、溶かした金額に関係なく、負けたのは悔しい。

勝てば調子に乗って再挑戦し、負ければ悔しくてリベンジをはかる。パチンコとは、人の心理を利用した本当によく出来た商売だ。

リンみたいな負け客は、間違いなくカモの部類に入るだろう。店側からしたら、美味しい客だ。

「次は絶対勝って、負け金を取り返してやる」
「私は嫌よお」

熱くなってリベンジを誓う単純なリンとは対照的に、水銀燈はもう懲り懲りと言った様子をしていた。

「あんな煙臭い場所、二度と行きたくないわ」

「う……そ、そうか……」

しかめっ面をして、露骨に嫌悪感を露にして言う水銀燈に、リンは反論出来なかった。

リンも煙草は苦手だが、水銀燈は彼以上に嫌っているようだ。あの煙草臭が蔓延した店内で、文句も言わずにパチンコに付き合ってくれた事を感謝すべきだろう。

だが、やはり我慢の限界に達したようだ。この様子では、少なくとも水銀燈を連れてのパチンコはもう無理である。

まあ、そう頻繁に行くつもりは無かったので、別に気にする事でもなかった。それに、我慢出来る程度だったとは言え、リンも煙草は苦手だ。苦手な場所に行く事を控えられるなら、その方がいい。

水銀燈と言うブレーキ役が居て、助かった。

水銀燈と一緒に暮らすようになって、リンの自堕落な生活は相変わらずだった。

しかし、生活の中身は変化していた。今までは、部屋で漫画を読んでいた、外をフラついたり、ずっと独りで寂しい時間を過ごしていた。それが、水銀燈と言う同居人を得て変わった。一緒にゲームやたわいもない話をしたり、こうして外出をしている。たまにだが、漫画論で口論になる事もある。リンにとっては、劇的な変化と呼んでも過言では無い。

独りの時よりも、水銀燈と居る『今』の方が同じ堕落した生活でも、妙に生きてる実感が沸いていた。

改めて水銀燈の存在をありがたく思った時、もう片方の胸ポケットに入れてある携帯電話が、バイブ機能で震えた。

「ん？ メールかな？」

リンは、携帯電話を取り出し、開いて画面を見た。

この携帯電話は、リンではなく水銀燈の物だ。改運屋の社長である春香との連絡手段として、携帯している。携帯電話のメールで、依頼が送られるのだ。ソレ以外にも、たまに仕事とは関係無しに、たわいもない内容のメールが届いたりする。春香なりの、水銀燈とのコミュニケーションなのかもしれない。

今回届いたメールは、依頼の方だった。

若干緊張した様子で、リンはメールの内容を見た。

『先日は、お仕事お疲れ様でした。お休みのところ申し訳ないのですが、依頼が来ましたので内容をお伝えします。』

今回も、ある人物の救済になります。その人物の名前は、プレシア・テストロッサ、アリシア・テストロッサ。名前を見てお察しがついてると思いますが、この救済対象は親子になります。都合が良い事に、間もなくお二人とも、リンさんの部屋にお着きになります。救済対象である親のプレシア・テストロッサは病魔に蝕まれ、娘のアリシア・テストロッサは若くして亡くなっています。

具体的な救済内容は、病の治療と死者の蘇生となります。無茶な要望だと言うのは、重々承知していますが、どうぞ、よろしくお願いします。

森山春香
』

依頼メールを読み終えて、リンは一言。

「いや、無理だろう」

病気の治療？

死者の蘇生？

どちらも凡人のリンには、不可能な要求だった。医者でも無い自分が病気を治せるハズも無いし、死者の蘇生なんて他の人にも出来

っこない。蘇りが許されるのは、フィクションの世界だけだ。

無茶な依頼に呆れるリンだったが、いや、待てよ、と思い直す。自分には無理だが、もしかしたら水銀燈なら出来るのではないだろうか。

期待を胸に、リンは訊いてみた。

「ねえ、水銀燈。病気の治療とか、死者の蘇生とか出来る？」

「そんな事出来ないわぁ。私は戦闘タイプだし、いくら魔法でも死者の蘇生なんて無理よ」

ああ、そうか、とリンは少し残念そうに返事をした。

水銀燈が戦闘向きなのは、プログラムとの闘いを見て予想はしていた。

しかし、そうになると、この依頼は解決不可能なのではないか？

ウームと眉根にシワを寄せ、リンが悩んでいると、今度は水銀燈が言った。

「ねえ」

「ん？ 何？」

「早く家に戻った方が、いいんじゃないのお？」

「え？」

言われて、リンは思い出した。

メールには、救済対象の親子はリンの部屋に現れると記されている。

「ヤッバ！」

暢気なリンも、この時は慌てて走り出した。

どんな親子か知らないが、家族に見つかったりしたら大騒ぎにな

る。向こうが部屋に現れる前に、家族に見つかる前に、先に帰らなければ。

全速力で家に向かうリンの胸ポケットの中で、水銀燈は溜め息をついた。

＊

走って家に着いたリンは、鍵のかかった玄関に安堵した。鍵がかかってると言う事は、家族は外出中なのだ。その点は助かった。だが、視線を落として異変を発見した。玄関の隙間から、液体が漏れ出てるのだ。緑色の液体が、床に広がっていく。

「な、何だ……？ この、バイオ液のような水は……？」

得体の知れない液体に恐れと警戒心を抱き、リンは顔をひきつけた。

胸ポケットに居る水銀燈は、言葉を発さず冷静に沈黙している。中で何か異変が起こっていると判断して、リンは玄関の鍵を取り出す。動揺して少し手間取ったが、すぐに玄関を開いた。

「うおおおおっ!？」

家の中を見た瞬間、リンは目を丸くして驚愕の声を上げた。

なんと、家の中が緑色の液体で水浸しになっているのだ。壁や天井に被害は少ないが、床は完全に浸水している。

「な、何だコレはアアアア！ 何をどうしたら、こうなったアアアア!？」

昼間だと言うのも構わず、リンは声を上げた。近所迷惑なんて知った事か。そんな事よりも、目の前の異常事態だ。

急いで家の中に入り、玄関を閉める。取り乱した様子でリンは、家中を見回した。すると、階段も濡れてる事に気付いた。視線を上げ、二階を見る。状況から推測すれば、おそらく浸水の原因は二階にある。

リンは靴を脱ぎ、浸水した床に踏み込んだ。

「冷たっ！」

緑色の液体に足を入れた瞬間、冷たい感触に襲われた。まだまだ寒い時期なので、水も冷たい。

冷たい水浸しの床を抜け、階段を上がって二階を目指す。迷わずリンは、自分の部屋を開けた。

そこで、衝撃の光景を目にした。

「はあ!？」

目の前の光景にリンが出したのは、叫びではなく、短い疑問の声だった。

浸水したリンの部屋に、二人の人間が居た。一人は、明らかな年上の女性で、ベッドの上に倒れている。意識は無いようだ。艶やかな黒い長髪で、黒いマントを羽織り、やたらと露出の多い挑発的な紫色のドレス風の服を着ている。随分な年のように見えるが、倒れてる姿が妙に色っぽい。

もう一人は、大きな透明のカプセルの中に入っている。長い金髪で、幼く見える女の子は裸で居た。

多分、大人の方がプレシアで、子供がアリシアだろう。

カプセルの下の方に、緑色の液体が残っている。透明なガラス部

分が割れてるので、液体の出所は、このカプセルだろう。何かの拍子に割れて、中身が出てしまったのだ。

現場に駆けつけたリンは、混乱していたが、マズイ事態である事は、すぐに解った。

「ヤバいって……！　こんな所、誰かに見られたら絶対ヤバいって！」

こんな場面を目撃されたら、間違いなく誤解される。親子誘拐と監禁罪で、もはや面倒事どころではない。警察介入だ。万が一にも、家族や他の人に見られてはならない。

最悪な未来予想をして、リンは慌てて雑巾を取りに、近くの洗面台に向かった。

「水銀燈も手伝って！」

「嫌よお。面倒くさいし、濡れたくないもの」

——この女^{アマ}ア……！

水銀燈に手伝いを求めるも、アッサリと断られ、心中で悪態をつく。

こうなったら、一人でやるしかない。乾いた雑巾を持って、まずは部屋を浸水してる水の処理に取り掛かる。

チマチマと水を吸い取り、洗面台で絞り出す地味な作業だ。作業をしながら、何時家族が帰ってくるか、内心ハラハラしていた。証拠隠滅をはかる犯人は、こんな心境なんだろうか。別に悪い事してる訳でも無いのに、落ち着かない気分だった。

何で俺がこんな目に？　と泣きたくなった。

「終わったあゝ！」

壁に寄りかかり、リンは脱力してその場に座り込んだ。

夕方になった時刻に、地道な作業は終了した。苦労の甲斐あって、何とか家族が帰ってくる前に濡れた箇所を全て拭き終えた。おかげで、腰が痛くなった。

ベッドの上では、プレシアがまだ眠っている。当然ながらアリシアも、目を覚まさない。

外から見られないよう、窓は全て締め切っている。

とりあえず、これで一安心だ。

よく頑張った、俺。

心中で、自分に労いの言葉を呟いた時だった。

部屋の外から、水銀燈が顔を覗かせて言った。

「終わったあ？」

「アンタねえ……ちよっとくらい手伝ってくれても、よかったんじゃないの？」

いつの間にか水銀燈は、リンの胸ポケットから出て、自分は見ているだけで楽をしていたのだ。

「今更言っても遅いでしょう？」

リンは溜め息をついた。

水銀燈に手伝いを求める方が、そもそも間違いだった。

それと不覚にも、「終わったあ？」と顔を覗かせた水銀燈の仕草が、妙に可愛く見えてしまった。

水銀燈にはかなわない、と思った。

こんなハズじゃなかった……！

どれくらい状況になった部屋を片付けたリンは、眠っているプレシアが起きるのを待った。

カプセルの中に入っていたアリシアの遺体も、プレシアが寝ているベッドと一緒に寝かせた。少女には不釣り合いな、サイズの大きいシャツを着せてある。いくら遺体とは言え、女の子を裸にさせておくのは忍びない。そうじゃなくても、側には母親が居るのだ。裸のままにしておいたら、起きた時に何をされるか解らない。

プレシアの回復を待っている間、リンは漫画雑誌を読んでいた。二十歳を過ぎても、ジ●ンプだけはやめられない。

水銀燈はと言うと、そんなリンの肩に座って漫画を読んでいる。

部屋の後始末を終えてから、随分と時間が経った。家族は外出から戻ってきて、日も沈んで空は暗くなっている。

そろそろ夕食を買いに行こうかな、とリンが席を立った時だった。ベッドの上のプレシアが、呻き声を上げた。

リンは動きを止め、水銀燈も漫画から顔を離してプレシアに目を向けた。

二人が注視する中、プレシアはゆっくりと体を起こした。ぼやけた意識をハッキリさせるように、頭を左右に振る。

「うっ……ココは……？」

部屋を見回して、リンと水銀燈の姿を見つけた。途端に、プレシアは険しい顔で身構えた。

「貴方達は誰……？」

「あ、初めまして。お……僕は、リン。こっちの肩に乗ってるのは、水銀燈です」

恐い顔で睨まれ、臆しながらリンは自己紹介をした。肩に乗って水銀燈は、涼しい顔でプレシアを見ている。

「ココは何処……？ アリシアは何処なの！？」

娘の居所を問うプレシアの声には、異様な迫力があつた。

「ココは、僕の部屋です。娘さんは、貴女の隣に……」

言われてプレシアは、弾かれたように自分の横を向いた。

ソコには、目を閉じて永眠している娘^{アリシア}の姿があつた。

「アリシア！」

声を上げ、プレシアはアリシアを抱き上げた。愛おしそうに頭を撫で、ギュッと離さないよう抱き締める。

見てるリンは、プレシアの声が下に居る家族に聞こえてないか、ハラハラしていた。肩に乗ってる水銀燈は、他人事のように漫画を読み続けている。

一旦アリシアから顔を離して、プレシアはリン達に鋭い眼差しを向けた。

「貴方達……アリシアに手を出してないでしょうね……？」

「だ、出してません！」

凄みのあるプレシアの問いに、リンは体を固くして答えた。ちょっとしたでも答えを誤れば、その瞬間に襲われるような危機感を抱いていた。

沈黙が続く中で、プレシアは睨みを解いた。とりあえず、リンが

嘘をついてないと判断したようだ。

「もう一つ訊くわ。ココは、アルハザード……？」

「ア、アルハザード？」

初耳の単語に、リンはおうむ返しをした。

しかし、漫画を読んでいた水銀燈は、ピクリと反応した。

「アルハザードって、何ですか？」

「……もういいわ」

リンから顔を逸らし、プレシアは憔悴しきった表情になる。

今のリンの反応で、ココが目的の場所で無い事を確信したのだ。

それは、プレシアにとって大きなショックだった。今までの苦勞が、全て無駄になってしまったのだから。

第97管理外世界——名称・地球。アルハザード全てを捨てて、我が身を犠牲にしてまで辿り着いたのが、目的地どころか魔法文明も発展していない世界だった。

意気消沈するプレシアの耳に、水銀燈の声が聞こえた。

「アルハザード。またの名を、『忘れられし都』。

遙か昔に存在していたと言われる世界で、時を操り、死者を蘇らせる秘術があると伝えられている。でも、次元断層に沈んで、その存在は伝説上のものとされ、実在しないと言うのが通説」

「え？」

水銀燈の説明に、リンとプレシアは顔を向けた。

「ふふふ。そんな伝説を信じてるなんて、貴女もおばかさんねえ」

「ちよっ……水銀燈！」

猫なで声で、挑発的するような物言いの水銀燈を、慌ててリンが諫める。

それから、気を悪くしたであろうプレシアに向き直った。

「あの、すいません！ この娘も、悪気があって言ったんじゃないんです！ 本当にすいません！」

頭を下げて、プレシアの怒りを鎮めようとする。

しかし、プレシアから怒りの声は上がらなかった。

「貴女……何者？」

前髪で隠れた左側とは反対の右目で、プレシアは疑念の眼差しを水銀燈に向ける。アルハザードを知る水銀燈を、同じミッドチルダ出身の者だと睨んだ。

ソレを水銀燈は、不敵な笑みで受け流す。プレシアが大事そうに抱いてるアリシアを見て、口を開く。

「場所も存在も不確定なモノにすがり付くなんて、よっぽどその眠り姫が大事なのねえ。随分と熱心で、娘想いの母親だわ。」

でも、貴女の頑張りもここまで。目的地に行く手段も無くして、

貴女は独りぼっち……」

「何が言いたい……？」

「うふふ。そんな恐い顔して、怒っちゃダメよお。血圧上がっちゃうから。乳酸菌摂ってるう？」

——いや、ココで乳酸菌言うか！？

水銀燈の台詞に、リンはツッコんだ。会話に入り込む度胸が無い故、心中に留まってしまったが。

挑発的な水銀燈の言葉に、明らかにプレシアは不快に思っている。二人の会話に口を挟むか、下手に介入しないで見守るか、リンが悩んでいると水銀燈が言った。

「けど、安心しなさい。私達が貴女を救ってあげる」

「どういう意味かしら？」

「そのままの意味よお」

不敵な笑みの水銀燈と厳しい顔つきのプレシアが、互いを見据え合う。

場の空気が悪くなってるのを感じて、リンは口を挟んだ。

「あの……僕等、改運屋って言う会社の人で、貴女みたいに困ってる人を助けるのが仕事なんです」

「改運屋……」

ポツリと呟き、プレシアはリンに目を向けた。

「貴方達に、何が出来るって言うの……？」

「そ、それは……」

プレシアの問いに、リンは言葉を詰まらせた。

生き返りの手段を持ち合わせていないリンにとって、厳しい質問である。こんな時、ザ●リクが使えたり、ドラ●ンボールが在ったりすれば解決なのだが、現実には甘くはない。

「その……一緒に別の生き返りの方法と、貴女の病気を治す方法を探したり……」

「貴方達……私の病気まで知っているの……!？」

「え？ ええ、まあ……」

苦笑いで頷くリンを見て、プレシアは訊いた。

「どこまで、私達の事を知っているの……?」

「え、ええっと……貴女が病気だって事と、娘さんが亡くなっている……って事ぐらいです。その他の詳しい事は……」

「そう……」

リンが答えると、プレシアは僅かに顔を俯けた。

他を威嚇するような威圧感は薄まり、代わりに暗く重い雰囲気が漂う。対面してるリンは、自然と苦笑いを消して、真顔になる。

ややあって、プレシアは重い口を開いた。

「この娘は……私が死なせたのよ」

「え……?」

意外な言葉に、リンは目を丸くして耳を疑った。

プレシアは続ける。

「私は、ココとは別の世界——ミッドチルダの研究所で研究員として働いていたわ。次元航行エネルギーを専門に、チームのリーダーとして研究を続けた。」

ある日、上層部から無茶なエネルギー実験の命令を受けたわ。エネルギー制御の難易度、実験の危険性を訴えて延期を試みたけど、命令は覆せなかった。

あの時……あの時、どうして命令に従ったのか……! 命令違反してでも、実験を中止にするべきだった……!

実験は失敗して、暴走して爆発したエネルギーは、アリシアを……アリシアを……!

いつの間にか、プレシアの声は嗚咽に変わり、頭を抱え込んだ。

「こんなハズじゃなかった……！ アリシアが居ない世界なんて、私には考えられない、耐えられない！ だから私は、『人造魔導師』の技術でアリシアを生き返らせようとしたわ！

でも、ダメだった！ 姿はアリシアと同じでも、記憶を引き継がせても、ダメだった！ アレはアリシアじゃない！ アリシアとは別人！ 私は、あんな『失敗作』を造る為に、耐えてきたんじゃない！ あんな『失敗作』に注ぐ愛情なんか無い！

だから私は、でき損ないの『失敗作』を棄てて、アルハザードで失った時間を取り戻そうとしたのよ！」

プレシアの悲痛な叫びが、室内に響いた。肩を震わせ、涙が止めどなく目から流れている。

初めてプレシアは、他人に胸の内を告白した。

プレシアは、誰かに話したかったのかもしれない。他人が信じられなくなり、独りで抱え込んでいた悲しみ、自責の念、願いを、誰かに聞いて欲しかったのかもしれない。

プレシアの叫びを、リンは黙って聞いていた。

ふとリンは、隣に居る水銀燈の様子をうかがった。

その瞬間、背筋がゾクリと凍った。

先ほどまで、不敵に笑っていた水銀燈の表情が激変してるのだ。眉間にシワを寄せ、相手を射殺するような眼差しをプレシアに向けている。怒りの形相なんてもんじゃない。鋭い眼には、激しい憎悪がこもっている。

直接向けられてはいないが、顔を見た瞬間にリンは怯えた。こんな水銀燈を見るのは、初めてだった。

「す、水銀燈……？」

恐る恐る名前を呼ぶと、答えずに水銀燈は身を翻した。
窓を開けると、黒い翼を広げて、無言で部屋を出ていった。

「水銀燈！」

急いで窓に駆け寄り、名前を呼んだが戻ってこなかった。

——何なんだよ？

水銀燈の事情を知らないリンには、訳が解らなかった。

＊

時空管理局本局。

一人の女性局員が、デスクに座っている男性局員の前に立っていた。

男性局員は、白髪混じりの黒髪、顔にはシワが刻まれ、威厳が感じられる。何やら向かい合ってる女性局員と、手続きをしてるようだ。

ややあって、男性局員から許可が降りた。手続きの内容は、休暇の申請だった。

許可を得た女性局員は、一礼して部屋を出た。

廊下を歩く女性局員は、長い金髪に魅力的なツリ目、誰もが目を引く整った綺麗な顔立ちで、青い本局制服を着こなす身体もスタイルが良く、『美人』の一言に尽きる容姿をしている。年齢は若く、十代後半と思われる。凡人から見れば、高嶺の花と呼べる存在だ。その美人局員は、込み上げてくる笑いを抑えるのに必死だった。だが、その顔には、既に薄ら笑いが浮かんでいた。

行く前から、心が躍っている。根拠は無いが、目的地に着けば面白い事が起きると予想していた。

「久しぶりに、楽しい休暇になりそうね」

美人局員の名は、黒岩聖麗^{くろいわせいらい}。

時空管理局でただ一人の『無階級局員』。

期待に胸を膨らませ、彼女は舌舐めずりをした。

行き先は、第97管理外世界に指定されている、地球の日本。

最悪

プレシア達を部屋に残して、リンは飛び出た水銀燈を捜すべく外に出た。

しかし、肝心の水銀燈が行きそうな場所が解らない。教えてもらった携帯電話の番号にかけるも、繋がらない。メールも返ってこない。

何の手掛かりも無いまま、リンは水銀燈を捜す事となった。暗くなった町を、闇雲に駆け回る。近場の公園、商店街、学校、無いとは思いながらもゲームセンター等々、とにかく色んな場所を捜し回ったが、水銀燈の姿は無かった。

何処に行ったのか、皆目見当もつかない。それ以前に、人間の自分^ンが水銀燈を見つける事自体が無茶に思える。水銀燈は空を飛べし、その気になれば転移魔法で長距離の移動が出来る。移動範囲は、常人の域を遥かに越えて無限並だ。行き先に心当たりがあるならともかく、そんな人物を足のみで見つけるのは、至難の業を越えて不可能だ。

道の真ん中で、疲れたリンは息を切らしていた。

——勘弁してくれよ……！ 仕事前に、面倒事は御免なんだよ……！ ああ、面倒くせえ……！

疲労と水銀燈が見つからない事が、リンをイラつかせる。

まだまだ寒い時期だと言うのに、走り回ったせいで体は熱くなっていた。その熱さも一時のもので、しばらく突っ立っていたら一気に冷えるだろう。吐く息も白く、寒い季節を物語っている。

一人で居るであろう水銀燈の姿を、想像した。寒空の下、決して厚着では無い水銀燈の姿を——。

小さく舌打ちして、リンは再び走り出した。当てはなく、ただがむしゃらに走るだけだった。

結局、何処を捜しても水銀燈の姿は見つからなかった。飛んで別の町に向かったのか、それとも転移魔法とやらで別の世界に飛んだのか。解らないが、結果として水銀燈を見つけられなかった。

疲れきったリンは、重い足取りで帰路についていた。もう走る体力は、これっぽっちも無い。

「ホントに、何処行っただよ……？」

疲労感タップリの溜め息をつき、リンは猫背のように背中を曲げた。

ふとリンは、自分の腹に手を当てた。夕飯前に走り回ったせいで、空腹になっていた。ちょうど近くにコンビニがあったので、今夜は弁当でも食べるか、と店内に入る。自分とプレシアの分、それからホットの缶コーヒー・ブラックを買った。

買い物袋を片手に、リンは考える。とりあえず、家に帰ったら社長——春香に連絡して、事情を話して行き先に心当たりがないか訊いてみよう。それで何か聞けたら情報を手掛かりに動くし、無かったら仕方ない、もう一度闇雲に捜すしかない。

今後の行動を整理してる間に、家の前に着いた。

何気なく顔を上げた時、リンの視線が止まった。暗くて確認しづらいが、屋根の上に何か見えるのだ。見つけたモノ自体が黒くて、夜の闇に溶け込んでる。それでも、目を凝らしてよく見てみる。

まさか、と思いながら見ると、予想は的中した。ちょうど二階にある自分の部屋の前の小さな屋根に、黒いドレスを着た女の子が座っていた。

「お前……マジかよ……？」

頭を抱え、妙に脱力した気分になった。

散々街中を走り回って、スタート地点がゴールだったのだ。多分、周りを飛んだ後で戻ってたんだろう。俺の今までの労力を返せ！と叫びたかったが、夜中である事も考え、何とか呑み込んだ。

半面、水銀燈を見つけてホッと安心もした。
やれやれ、とリンは家の中に入った。

＊

「水銀燈」

リンは窓から僅かに顔を出して、屋根に居る水銀燈に声をかけた。自分の部屋に戻ったリンは、プレシアに買ってきた弁当を渡して、水銀燈を部屋に連れ戻そうとしていた。水銀燈が居る位置は、ちょうど部屋の中からでは見えない死角になっていた。窓から顔を出さないと、見つからない。

寒い夜空の下で、水銀燈はちよこんと屋根に座っている。

「どうしたの？ 外寒いよ？ 早く部屋に入ったら？」

部屋に入るよう促すが、水銀燈は見向きもしないどころか、ピクリとも反応しない。

気まずい沈黙が生まれ、寒さもあってリンは小さく唸った。

「あのさ、ホントにどうしたんだよ？ さっきのテストロッサさんの話で、何か気に入くない点でもあったの？」

水銀燈の様子がおかしくなって、家を飛び出た原因があるとすれば、プレシアの話以外に無い。

それまでは、水銀燈も普段通りの態度をしていた。急変したのは、プレシアの話を聞いてからだ。間違いなく、原因はソコだ。

しかし、仮にそうだとしても、何故だろう？ 水銀燈とプレシアは初対面のハズだ。あの時の水銀燈は、機嫌が悪いなんて生温いレベルではなかった。鈍いリンでも分かる程に、明確な憎悪を放っていた。初対面の人間相手に、あそこまで憎悪を抱けるものだろうか？ よっぽどプレシアの話が、気に食わなかったのだろうか？

しかし、水銀燈は何も答えない。沈黙を守って、屋根の上にジッと座り込んでいる。

はあ、とリンは根負けしたように溜め息をついた。

「まあ、別に無理に聞く気は無いけどさ……」

出来れば原因を知って、とつと問題を解決させたかったのが本音だ。仕事前に、面倒なトラブルは御免だからだ。

しかし、今の状態じゃあ、とてもじゃないが理由を話してくれそうにない。だから、ココはリンが折れた。

「窓、開けとくから。風邪ひく前に、中に入った方がいいよ。それと、コレ置いとくから」

言ってリンは、水銀燈の後ろに缶コーヒー・ブラックを置いた。

窓を開けっ放しにする事に、特に危機感は無かった。ここら辺には泥棒なんて来ないし、何より水銀燈が居るのだ。家に侵入しようものなら、返り討ちに遭うだろう。

そう暢気に考え、リンは開けっ放しの窓から顔を引っ込め、自分も弁当を食べようと割り箸を割った。

*

屋根に残された水銀燈は、遠い目をしていた。

寒い夜風が、白い肌に触る。

一人になるのは、久しぶりだった。最近、初めて出来た契約者と過ごしていた。

しかし、また独りに戻るかもしれない。

水銀燈の脳裏に、プレシアの言葉が蘇る。

——でき損ないの『失敗作』を棄てて——

あの言葉で水銀燈は、薄れていた内にある憎悪が蘇り、そして恐れられた。

やっぱり、人間はそういう生き物だ。

一抹の不安を抱き、水銀燈は後ろに置かれた缶コーヒー・ブラックを見た。

また私は捨てられるの？

私は失敗作じゃない。

壊れた子^{ジャンク}なんかじゃない。

だから、私を——。

＊

『そうですか。その様な事が……』

「はい」

夕飯を済ませ、プレシアや家族が寝静まったのを見計らって、リンは電話をしていた。通話の相手は、社長である春香だ。

水銀燈の飛び出し事件の原因が気になり、春香なら何か心当たりがあると思う、先ほど電話をかけたのだ。幸いにも春香はすぐに出

てくれて、深夜だと言うのに嫌な様子など微塵もせずに、話を聞いてくれた。

ちなみに、水銀燈はまだ屋根の上に居る。

廊下に立っているリンは、困った表情を浮かべた。

「それで、森山さんなら何か知ってるんじゃないかと……」

最初は、春香の事を『社長』と呼んでいたのだが、本人から「気軽に名前でごください」と言われ、今では名字で呼んでいる。今回が初めてと言う訳ではないが、美少女と電話するのは、妙に緊張する。用件の内容に関わらず、だ。

一方、春香の方は、いつもと変わらぬ穏やかな口調で言った。

『そうですね……。確かに私は、水銀燈の過去についても知っています。今回の件も、水銀燈の過去に起因していると断言出来るでしょう』

「そうなんですか？」

やはり春香に訊いて、正解だった。

そう喜んだのもつかの間、春香が予想外の言葉を続けた。

『ですが、申し訳ありませんが、リンさんにお教えする事は出来ません』

「え!？」

『他人の過去を、他人の口から勝手にお話するのが嫌いなのです。勝手な理由だとは思いますが』

「あ、いえ……」

春香の気持ちも、解らないではない。

人には、言いたくない事の一つや二つあるものだ。ソレを勝手に

他人の口から明かされるのは、不愉快な事だろう。「何余計な事喋ってんだ！」ってなものである。

しかし、それでは水銀燈の問題が解決しない。このままでは、ギクシャクした気まずい空気が続く事になる。それだけは阻止したいところだ。

悩むリンの耳に、春香の穏やかな声が入る。

『彼女の過去については、お教え出来ませんが、代わりに一つだけ』

「は、はい。何ですか？」

『水銀燈の側に居てあげて下さい』

ハア、と答えて、リンは前にも似たような言葉を受けた気がした。そうだ。初めて春香と公園で会った時だ。あの時も去り際に春香は、「水銀燈をよろしくお願いします」と言った。仕事の相棒としての意味だと思っていたが、そうじゃないのかもしれない。

『ソレが貴方に出来る最善の行動であり、彼女にとって一番必要な事ですから』

「分かりました」

そう言われては、こちらは了承するしかない。

それに、自分でも良いアイディアは浮かばないのだから、下手な事をするよりはマシだろう。何より、美少女の春香からの頼みだ。もとより断る気は無い。

水銀燈の件が済んだところで、春香が言った。

『あつ、リンさん。実は、私からもお話があります』

「はい、何でしょう？」

『今回の依頼に関する事なのですが、パソコンはございますか？』

「あ、はい。ちょっと待ってて下さい」

リンは一旦携帯電話を側の棚に置き、自分の部屋の扉を開ける。部屋の明かりは消えていて、ベッドではアリシアを抱いてプレシアが眠っている。起こさないように静かに部屋に入り、ノートパソコンが置いてある机に近づく。手に取る際に、チラッと視線を横に移す。相変わらず窓は開けっ放しで、寒い風が入ってくる。ちよっと近付いて、窓の外をうかがう。案の定、水銀燈はまだ屋根に座り込んでいた。気付かれない程度に溜め息をつき、ノートパソコンを手にリンは部屋から出た。

部屋を出たリンは、ノートパソコンを起動させて携帯電話を手にとった。

「お待たせしました」

『いえ。それでは、今から言う言葉を検索して下さい。単語は“シラス村”で、漢字の白に動物の家の巣です』

「ええっと……白・巣・村っと……」

キーボードを叩き、文字を入力して検索をした。すると、幾つかのサイトが出た。

『一番上に表示されているサイトを見て下さい』

春香の言う通りのサイトをクリックした。

画面にサイトが表示される。

『白^{しら}巣^す村^{むら}。』

死ぬ事が無い、と言うところから来ている。死なぬ、しらす、白巣村』

「ダジャレか？」

名前の由来を読んで、思わずリンはツッコんだ。
気を取り直して、続きに目を通して見る。

『今から約千年前、村は大きな災いに襲われた。大自然の怒りとも言える大災害に見舞われ、多くの住民は死に、村は壊滅状態に陥った。その時、村に一人の少女が現れ、死にかけの村人を助け、更には死人までも甦らせた。村の人々は、自分達を救ってくれた少女を神様と呼んで崇めた。』

村では、今でもその神様を祭った洞窟がある』

「ト●ック？」

内容を読んだリンは、某人気推理ドラマの画が脳裏を過り、またも思わずツッコんでしまう。

電話の向こうから、春香が訊いてくる。声はいたって真剣だ。

『どう思われますか？』

「いや、どうって……ただの言い伝えですよね？」

『私は、ソコに記されている事は本当だと考えています』

マジですか？　と言う言葉は、何とか喉の奥に呑み込んだ。

こんなのは、浦島太郎やかぐや姫のような昔話と同じようなもの。要するに、昔の人が作ったフィクションだ。

春香には悪いが、リンにはとても信じられなかった。

「そんな……あり得ないですよ」

『リンさん。ロストログアはご存じですよ？』

「ええ、まあ、はい」

ロストログア。

過去の超文明の文化遺産であり、物にもよるが、扱いを間違えると一つの世界どころか次元世界を崩壊させる程の危険性を秘めている。リインフォースから聞いた事だが、いまだにリンには、その危険性が解らなかった。次元世界の崩壊と言われても、規模が大き過ぎていまいちパツとしない。

そんな訳の解らない物と、この村とどう関係があるのか。怪訝そうに首を傾げるリンに、春香が言う。

『おそらく、その村には不老不死に似た効果のロストログアがあると思います』

「え！？ この村に、ロストログアが？」

突拍子の無い意見に、リンは驚いた。

電話の向こうの春香は、冷静に言う。

『ロストログアは、失われた世界の文明の結晶のような物……言わば、その世界の宝です。宝を隠すには、その宝の存在を知る者が居ない場所が最も安全な隠し場所です。この地球には魔法の文明はありませんし、幸いにも時空管理局からは管理外世界に指定されません。例えば管理局が来たとしても、事件現場以外には踏み込みません。隠し場所には最適です』

「な、なるほど……」

春香の意見に納得して、リンは頷いた。

木を隠すなら森の中、と言う諺ことわざがあるが、今回はソレとは全く別の類だ。沢山の魔法世界、あるいは魔法道具の中に隠すのではなく、魔法と全く無関係な世界に隠した。

ふとリンは、怪訝そうに訊いた。

「仮にそうだとすると……このサイトの文献っぽい文に出てる子って、千何歳って事ですか？」

『そうなりますね。いかがですか？ 調べてみる価値はあると思います。』

「え？ あ、はあ……」

リンは歯切れ悪く答えた。

＊

翌日の白巢村。

「最悪」

村に着いての水銀燈の第一声に、リンは苦笑いを浮かべた。

結局、リンは春香の意見を聞き入れて白巢村にやってきた。自分達だけでは、何も出来ずにいたであろうから、他に選択肢は無かった。

水銀燈の転移魔法によって、移動は楽に出来た。白巢村は周りを自然に囲まれ、木造の家がポツポツと見える。他には、小さな田んぼがあったり、畑仕事に勤しむ元気なじいさんばあさんの姿くらいだ。都会的な文明は、全く無い。その代わり、静かで空気が綺麗だ。たまには、こんな田舎に来るのもいいかもしれない。

そんな田舎にやってきたのは、リン、水銀燈、プレシア、そしてアリシアの四人だ。何も無い所に急に現れる場面を、村の人間に見られないよう人気の無い場所に転移した。座標合わせに、水銀燈が苦心したのは余談だ。

アリシアは、プレシアが背負っている。遠目からなら、ただ眠っ

てる娘を背負ってるようにしか見えないハズだ。近くでも、そうマジと見られなければ、死んでるとはバレないだろう。二人共、服は着替えてある。プレシアが着ていた紫のドレスは、露出が高く目立ち過ぎる。出発する前に、リンが使ってるシャツとジーンズを貸した。それなりに年齢は高いハズだが、意外にも着こなしていたのでリンは少し驚いた。

そして水銀燈だが、こちらは自分の扱いにご立腹の様子だった。何せ、リンが背負ってるリュックサックの中に入れられてるのだから。不服に思った水銀燈は、「最悪」とさっきの台詞を言ったのである。

刺激しないように、やんわりとリンが言う。

「いや、ほら、水銀燈は子供じゃ通らないから。それに、子供扱いされるの嫌いでしょう？」

「貴方も、この扱いも最悪」

水銀燈の機嫌が悪くなっていき、リンは引き攣った笑みになる。

春香の言う通りに水銀燈の側に居るが、状況は一向に良くならない。それどころか、リュック詰めなんて扱いも上乘せして、更に機嫌が悪化していた。それに、昨夜は結局、水銀燈は部屋に戻らず一晩中屋根に居た。

プレシアとは気まずい空気のまま、リンは溜め息をついた。まだ何もしてないのに、物凄く疲れた気分だった。ああ、泣きたくなってきた。

悲しく思った時、リンは申し訳なさそうに言った。

「あの……すいません。ちょっと、お手洗いに行っていいですか？」

「え？」

「貴方、馬鹿じゃないの？ 行く前に済ませときなさいよね」

プレシアは呆れ顔になり、水銀燈も不機嫌に至極当然の指摘をする。

「いや、すみません。大丈夫かなって思ったんですけど、急にきまして……」

「早く行ってきなさい。その子は私が預かってあげてるわ」
「すみません。すぐ戻りますから」

水銀燈の入ったリュックをプレシアに預け、リンはトイレを目指して走り出した。

「……最悪」

リュックの中の水銀燈が、ポツリと呟いた。

トイレを求めて村を駆けるリンは、周りを見渡して公衆トイレが無い事に気付いた。

「まいったな。こりゃ家のトイレを借りるしかねーな」

困った顔で頭を掻き、さて何処で借りようかと悩む。出来るだけ、一番借りやすそう、貸してくれそうな家を選ぶとした。

その時、ふと視界に人を捉えた。村の老人では無い。外国人と思われる長い金髪の若い女で、外見から女子高生くらいに見える。明らかに場違いな、どこぞの青い制服を着て、足には黒いタイツを履いている。

横切る瞬間、ニヤツと笑いかけられた。

思わずリンは、強張った顔で振り返り、少女の背中を見た。

「な、何だ……?」

笑いかけられたと言うか、笑顔で睨まれたような、そんな気がした。不覚にも、睨まれた瞬間ビビってしまった。

初対面の少女に睨まれる理由は無いが、と考えたのも短く、尿意を思い出して慌てて駆け出した。

ただ一つだけ確かなのは、少女は美少女だった。

ショーは人数が多ければ多いほど愉しめるのに（前書き）

活動報告で、あんな事を書きましたが、思うところあって何とか続けてみよう。

すみませんでした。

情けなく、みつともない作者ですが、これからもよろしくお願いします。

ショーは人数が多ければ多いほど愉しめるのに

まだ明るい内に、リン達は例の神様が祭られてる洞窟前に到着した。

『シラス洞窟』と村と同じ名前が付けられてる洞窟は、村から少し離れた森の中にある。まだ昼頃で陽が昇ってると言うのに、森の中は鬱蒼と木々が生い茂っており、空からの光を遮って薄暗くなっていた。動物の鳴き声の一つも聞こえないのが、逆に不気味に感じられる。

洞窟の前に立つリンは、直感する。何かある、と。別にリンは、気配を読み取る武術の達人だったり、感覚が特別優れている訳では無い。それこそ、全ての能力は平均的な人間だ。そんな凡人のリンでも感じられる程、洞窟から漂う雰囲気は得体が知れない異様さがあるのだ。洞窟近辺に動物が見当たらないのは、おそらく、この異様な雰囲気のせいだろう。

妙な緊張感を抱き、リンは喉を鳴らして唾を飲み込んだ。

「あの、マジで行くんですか？」

「今更何言ってるの？ おばかさあん」

「……ですよね」

小声でリュックから出た水銀燈に恐る恐る尋ね、冷たく言葉を返されてしまった。

入る前から、嫌な空気を肌で感じて、早くもリンは帰りたいたい気分になっていた。

しかし、今更後戻りは出来ない。後ろを見れば、プレシアが険しい顔をしている。人造魔導師計画、アルハザードと娘を蘇生させる方法を次々と失敗に終わった今、この洞窟の中にあるであろうロストロギアが、彼女の一縷の望みなのだ。今回の搜索に全てを賭けて

いる、そんな決死の覚悟を固めた顔をしていた。

そんなプレシアの前で、今更引き返す事など出来ない。

逃げられないのは、分かっている。

仕方ない、とリンは諦めの溜め息をついた。自分で引き受けた事だし、ココで引き返すのは格好悪い。だから、洞窟に入るのはいいいけど、とリンは思った。

俺が先頭じゃなくてもよくね？

一行の先頭に立っているのは、リンだった。危険な場所では、男が先頭に立って率先して進む。コレは、全世界共通の常識のようだ。水銀燈に前を譲ろうと思ったが、「おばかさあん」と一蹴されるのは目に見えてるのでやめた。

「じゃあ、行きますか……！」

ようやく意を決したリンは、洞窟内に一步踏み込んだ。

＊

洞窟の中は、当然ながら真っ暗だった。

だが、ソコは水銀燈が力を貸してくれた。手の平に輝く魔力球を作り出して、暗闇の洞窟内を明るく照らした。

水銀燈が明かりを作ってくれて、リンは心の底から安堵した。人間は情報の殆どを視覚から得ているので、コレを塞がれると不安になる。明かりがあるのと無いのでは、精神的余裕が全然違ってくる。洞窟内に足音を鳴らして、一行は静寂な空間を進んで行く。周囲への注意も怠らない。見た限りでは、何の変哲もない自然が作った洞窟だ。だが、文献通りに不死の少女が存在しているなら、何かあるかもしれない。こういう場合、侵入者を排除する罠が仕掛けられ

てるものだ。

そして、しばらく歩いたところで一行は足を止めた。

「うおっ!？」

足下を見て、リンは驚いて目を剥いた。

目の前に、大きな空間が広がっていた。しかも、その中にはボコボコッと沸騰を繰り返す不気味な液体が満ちている。まさか、と思いつつ、リンは近くにあった石を沼に落とした。リンが見守る中、落ちた石は短い音を立ててあっという間に溶けてなくなった。

「なっ……!？ 硫酸の沼か!？」

一瞬で石が溶けたのを見て、リンの顔が蒼ざめる。

第一関門・硫酸の沼。

「初っ端から難問っすよ! どうするんすか、水銀燈!？」

「貴方、本当に馬鹿じゃないの?」

呆れた様子でリンを見下して、水銀燈が言う。

「こんなの、飛び越えればいいだけでしょう?」

「あ……」

言われてリンは冷静になった。

飛行魔法が使える水銀燈に運んでもらえば、楽に向こう岸まで移動する事が出来る。ソレは、プレシアも同じだ。彼女も飛行魔法は使える。使えないのは、リンただ一人。

「えっと……じゃあ、俺の事、運んでくれます?」

リンが頼むと、水銀燈は嫌そうに面倒臭がりながらも、肩を掴んで運ぶ体勢をしてくれた。

両肩の黒い翼を広げ、リンを掴んで水銀燈は宙に飛んだ。続くプレシアも、飛行魔法で硫酸の沼の上を飛ぶ。

運ばれるリンが下を向くと、沸騰を繰り返す硫酸の沼が目に入る。アレに落ちたら、と思うだけで鳥肌が立つ。

だが、魔法が使える水銀燈達のお陰で難なくクリアだ。

そう思った時だった。

ハッとした顔で、水銀燈が左右を見た。つられてプレシアも、左右の壁を見る。

そして次の瞬間、左右の壁に野球ボール並の大きさの穴が幾つも空き、中から何かが飛び出た。水銀燈達を挟み撃ちにするように、飛び出た何かの雨が迫りくる。

その時には、既に水銀燈は行動に出ていた。

「はあ!？」

気付いたリンが情けない声を上げた時には、水銀燈の行動は完了寸前だった。

飛来物を防ぐために、水銀燈は黒い羽を更に巨大化させ、掴んでるリンとすぐ後ろに居るプレシア達も一緒に身を包み、防御の体勢に入る。再びリンの視界は真っ暗に封じられ、頼れるのは聴覚のみとなった。周囲で金属が弾かれる甲高い音が連続で鳴り響き、暗闇で反射的に身を震わせる。黒羽は魔力を通して硬質化されていて、鋼の鎧と化していた。

しばらくして、音が止み、羽が広げられて視界が蘇った。

キョロキョロを周りを見回して、リンが尋ねた。

「す、水銀燈……! 今、何が起こったんだ? 一瞬しか見えなか

ったけど、壁から何か飛んできたような……」

「矢が飛んできたのよ。飛んでる私達を撃ち落とす為に……」

にじゅうトラップ
二重罠。

下の硫酸の沼を飛び越えようとする侵入者を、壁に仕掛けてある矢で仕留める算段だったのだ。

水銀燈の防御が速かったが、もし遅れていたら全員串刺しになっていた。プレシアは病気で身体が弱っていて、反応が鈍っている。水銀燈が居なければ、死んでいた。

最悪の危機を脱するも、まだリンは心臓が高鳴っていた。

「あ、あつぶねー！」

「……礼を言うわ」

プレシアも無愛想ながらも、助けてくれた水銀燈に礼を言った。

水銀燈は言葉を返さず、無言だった。

いまだに両者の間には、わだかまりのような気まずい空気があるが、水銀燈は私情で仕事を放り投げるような真似はしなかった。

無事に硫酸の沼をクリアして、一行は再び洞窟内を進む。

水銀燈が防御の魔法を使ったが、リンの体力はそれほど減ってはいなかった。先ほどの罠を凌ぐのに、多くの魔力を必要としなかったのだ。

水銀燈にとっては、先ほどの罠は全く恐い物では無かった。並の魔導師なら、障壁を砕かれて蜂の巣になっていただろう。水銀燈と並の魔導師では、質そのものが違うのだ。もっとも、プレシアも大魔導師と呼ばれた高ランクの魔導師であり、病に侵されてなければ容易く防いでいた。

しかし、リンは違った。メンバーの中で、ただ一人の魔法が使えない凡人だ。さっきの罠にビビって、弱腰になっていた。

そんなリンは、またも一行の先頭を歩かされていた。

ぎこちない笑みで、リンは後ろを飛ぶ水銀燈に言った。

「あの……先頭、代わらない？」

「貴方、男でしょう？ なっさけなあい」

取り付く島も無い。

水銀燈に冷たく突き放され、リンは項垂れた。メンバーの先頭とは、最も罠の餌食になる可能性が高いポジションだ。ココは実力者であり度胸もある水銀燈が、リーダーとして先頭に立って引っ張っていくのが妥当なのだが、“男”と言う理由だけでリンは先頭から外されずにいた。リンは、男に生まれた事を呪った。

男女平等なんて嘘だ、理不尽だ、とリンは心中で哀しく叫んだ。しばらく進んだ一行は、また広い空間に出た。今度の空洞には、怪しげで危険な沼は無い。普通の地面が広がっている。

踏み出そうとして、先頭のリンは動きを止めた。先ほどの矢の罠が、脳裏を過る。もしかしたら、踏み込んだ瞬間に何か罠が発動するのでは？ と疑念が浮かんた。

しかし、ココで立ち止まってる訳にはいかない。前に進まなければ目的を達する事は出来ない上に、プレシアにはあまり時間が無い。さすがに、今日明日どうなるという程ではないが、身体が弱ってるのは確かだし、何よりリン達以上に必死だ。

結局、リンは空洞に足を踏み入れた。

理由は二つ。

一つは、長く躊躇してプレシアを苛つかせたくなかったから。

もう一つは、万が一、罠が襲ってきても水銀燈が護ってくれるだろう、と言うこと。

リンは基本的に、臆病であり他人任せな人間だったのだ。

踏み込んだ瞬間に罠が！ と言う事態は起こらなかった。冷たい空気に満ちている空洞内は、静かで今のところ罠の気配が無い。もしや落とし穴か！ と地面を見渡して確認するが、一見しただけで

は罨を仕掛けた痕跡は見られない。もつとも、仮に落とし穴が仕掛けられていたとしても、空を飛ぶ術を持つ水銀燈達には意味を成さない。凡人の自分には効果覲面だが。

しかし、意外な所から罨が来た。

リン達が、ちょうど空洞の真ん中辺りに着いた時だった。

前方の出口と後方の入り口が、突然現れた光の柵によって塞がれた。かと思えば、今度は頭上で何か音が聞こえた。音を聞いた瞬間、背筋にゾクリと悪寒が走り、嫌な予感がしてリンは顔を上げた。高い天井に、黒く巨大な四角い塊があった。何だ？　と思ったのもほんの一瞬で、リンはソレの意味を理解した。

ソレと同時に、分厚い黒い塊が天井から落ちてきた。

第二関門・落下する天井。

「マ、マジかよ!？」

圧倒的巨体が頭上より迫り、リンは目を硬く瞑って身を屈めた。無駄と解っていても、反射的に行う。

侵入者を押し潰さんと落下してくる黒い塊だが、しかし目的は達せられなかった。

反射的に動いたリンよりも早く、水銀燈が頭上に手を伸ばし、素早く魔力球を生成して、迫りくる落下物に向かって放つ。直径二メートルの魔力球と衝突して、空気を伝って重い振動を受ける。屈んでるリンは、大きな揺れを感じて平衡感覚を一瞬失った。黒い塊は、途中で動きが止まった。巨大な黒い塊と魔力球の力は拮抗して、動かない。水銀燈は、空いてる手に更に魔力球を作り、黒い塊と押し合っている魔力球に向けて放った。

二つの魔力球が混ざり合った直後、炸裂音と共に部屋の中心で青色の爆発が起こった。爆発音に混じって、何かが碎ける音が空洞内に響く。屈んでるリンの頭や体に、大小の破片が当たった。

音と破片の雨が止み、リンは恐る恐る顔を上げた。粉々になった

黒い塊の破片が、地面に散らばっていた。リンは、近くに落ちてた黒い塊を掴んで持ってみる。重い。こんな物を受けたら、人間などひとたまりもない。

だが、そのとんでもない物を、水銀燈は容易く破壊してみせた。悠然とした態度の水銀燈に、震える声で礼を言った。

「あ、ありがとう……！」

お礼の言葉に対して、水銀燈は素っ気なく鼻を鳴らすだけだった。彼女の反応は、半ば予想通りだったので、特に気にはしなかった。それよりも、プレシア達が気になる。振り向けば、我が子を抱えて障壁を張ってるプレシアの姿があった。彼女も無事ようだ。リンは、ホッと安堵の溜め息をついた。

プレシアも、安全を確認して障壁を解いた。

「また貴方に助けられたわね」

「別に……」

相変わらず、水銀燈とプレシアの空気は気まずい。

一方、気が抜けたリンは疲労感に襲われていた。今の水銀燈の魔法で、体力を消耗したのだ。だが、押し潰されるより遥かにマシだ。助かる為の代償と考えれば、安いモノである。

「ホラッ。さっさと立ちなさい」

水銀燈が冷たい声で、命令してくる。

軽く文句の一つでも言っただろうかと思ったが、リンは従順に頷きただけだった。水銀燈に命を救われた身だし、疲れて文句を言う気になれなかったのもあるが、今の彼女に妙な違和感を抱いてるからだ。水銀燈は確かに冷たい態度を取るが、以前は今ほどではなかった。

た。言葉にも、妙に棘のある感じだ。多分、変化はプレシアが来てからだ。彼女だけでなく、自分とも妙に距離を離してるように見える。

しかし、その理由を訊こうとはしなかった。多分、答えてはくれないだろうと思った。

とりあえず、今は依頼をこなす事が先決だ。
そう思い、先に進もうとした時だった。

「思った以上につまらない仕掛けね」

突然、背後から女の声が上がった。

一同は一斉に振り返り、空洞の入口を見た。柵が壊された入口の前に、青い制服を着た金髪の女性が立っていた。

「あっ……」

金髪の女を見た瞬間、リンは声を上げた。村で見かけた、あの女だった。

リンの側で、金髪の女を見たプレシアは表情を険しくさせた。

「管理局……！」

「え……？」

リンは、プレシアと金髪の女を交互に見る。それから、金髪の女が着てる青い制服に着目して合点がいった。

なるほど、アレは管理局の制服なのか。納得はしたが、何故プレシアが険しい顔をしてるのか解らなかった。

プレシアが娘を失い、生き返らせようと研究をしていた事やアルハザードを目指していた事は、知っている。だが、『闇の書事件』以前に海鳴市で起こった『P・T事件』の詳細について、リンは全

く知らないのだ。プレシアが事件の首謀者である事を知らない為、彼女の管理局員に対する警戒心が解せなかった。

しかも、水銀燈を見れば、彼女もまた恐い顔で嫌悪感を露にしていた。ソレは、家でプレシアの話を聞いた時に見せた表情と同じだった。自分を捨てた、管理局に対する憎悪の表れだった。

そんな二人の視線を受けても、女局員は笑顔で言った。

「ふふ。プレシア・テストロッサ……まさか、貴女が生きていたとはね。驚きだわ」

「……私を捕まえにでも来たのかしら？」

目の鋭さを強くして、プレシアは待機モードデバイスの杖を起動させて構えた。

女局員と視線を交わすプレシアの側で、リンは話についていけず困惑していた。ついていくどころか、サッパリ話が見えない。

そんなリンを他所に、女局員は続ける。

「安心してちょうだい。別に貴女を逮捕しに来たんじゃないわ。別の用事よ……！」

ニヤリと妖しい笑みを浮かべた。

そして彼女が笑った瞬間、場の空気が凍りついた気がした。何か見えない力に縛られたように、リンは体が動けなくなった。額からは嫌な汗をかき、心臓が早鐘のように高鳴っている。まるで、圧倒的捕食者に睨まれた獲物のような感じだった。

ヤバイ。

リンの中で、かつてない警戒信号が鳴り響く。リインフォースの中に巢食う闇、洞窟内の罠、何度も常軌を逸した恐怖を感じてきた。しかし、この女は違う。今まで相對してきた“危険”とは、まるで別物だ。そんな直感があった。

水銀燈とプレシアも、同じ空気を感じたのだろう。警戒心を超えた敵意の目で、女局員を睨んで身構えた。

不気味な程に妖艶な笑みで、女局員は言った。

「初めは、貴女達が洞窟内に仕掛けられた罠を抜けていく様子を見て愉しむつもりだったけど、あまりに罠がつまらないから、予定を少し早める事にしたわ。私が、貴女達の相手をしてあげる！

さあ、愉しい殺し合いを始めましょう……！」

舌舐めずりをして、女局員は不気味な笑みを更に歪めた。

女局員の目的は、犯罪者^{プレシア}の逮捕などではない。殺し合いと言う、狂気のショーだった。

「テストロッサ！」

臨戦態勢に入った水銀燈が、鋭い声を上げた。

「ソコで足が竦んでる子を連れて、ココから出て行きなさい！ 邪魔よ！」

プレシアは、反論しなかった。

一流の魔導師であるプレシアは、水銀燈に言われる前に女局員と対峙した瞬間に察していた。目の前に居る女局員は、自分以上に高ランクの魔導師であり、何より普通の人間には無い危険な匂いを纏っていること。

プレシアは矛を収め、側で固まってるリンの手を引いた。

「行くわよ！」

「えっ！？ ちょっ……待っ……！」

我に返ったリンは、水銀燈の背中を見る。

「水銀燈！」

彼女の小さな背中に声を投げるが、返事は来なかった。

この時、リンは言い知れぬ不安を抱いていた。胸がざわついて、苦しさが引かない。こんな気持ちを持ったのは、初めてだった。

リン達は出口の先に消えていき、空洞に水銀燈と女局員の二人が残された。

「あら？ 貴女一人で私の相手をするのかしらあ？ ショーは人数が多ければ多いほど愉しめるのに、残念だわあ……！」

狂気の女局員——黒岩聖麗の牙が襲い掛かる。

私はジャンクなんかじゃないっ！

リン達が場を去って、物足りなそうな様子を見せたセイラだったが、水銀燈の相手をする決めて気を取り直す。

何も無い両手に、それぞれ待機モードを解いた拳銃型のデバイスが握られた。薄暗い空洞内で黒光りしてる拳銃は、シンプルなデザインをしていて、まるで玩具のように見える。しかし、そのシンプルさが逆に恐ろしく見えた。

対する水銀燈は、以前の闘いでプログラムを仕留めた剣型デバイスを構えた。魔力を流して、青い魔力刃を生成する。距離を離れた状態で、飛び道具を持つセイラ相手に敢えて接近戦を狙っていた。

互いに戦闘態勢に入り、セイラが歪んだ笑顔で言う。

「さあ、始めましょう！」

素早く二丁の拳銃を構え、水銀燈に狙いを澄まして銃声を鳴らす。放たれた紅い魔力の銃弾は、空を走って標的に迫る。当たる寸前で、水銀燈は剣を振り抜いた。見事に銃弾を切り裂き、駆け出してセイラとの距離を縮める。初撃を防がれてもセイラは何ら動揺せず、接近してくる水銀燈に銃弾の雨を放つ。

今度は水銀燈は、剣を使わずに広げた黒い翼から羽を矢のように飛ばした。放たれた羽と銃弾は、宙で衝突を繰り返す。弾を相殺させ、その隙にセイラの懐に潜り込む。横薙ぎに剣を振り抜き、一太刀入れようとした刹那、セイラが笑い、刃を弾かれた。

「えっ!?!」

予想外の展開に驚き、水銀燈は一旦下がって離れた。

なんと、目の前に対峙してるセイラの手には、先ほどまで握られて

いた拳銃が消えて、代わりに剣が一本あった。西洋風のデザインで、太く大きな刀身の剣だ。

「いつの間に……!？」

怪訝に思う水銀燈だが、構わずセイラは襲ってくる。

頭を狙った上段からの刃を、水銀燈は硬質化させた翼を盾にして防ぐ。閉じた翼を広げて剣を弾き、同時にセイラに斬りかかる。だが、動きを読まれて簡単に刃をかわされた。直後に、反撃の横薙ぎの一閃が流れる。翼の羽ばたきの反動を利用して後ろに引き、紙一重で剣戟を避けた水銀燈を見た。セイラの手首に巻かれている、複数のアクセサリのような物を――。

再び間合いを離して、水銀燈は問うた。

「まさか……複数のデバイスを持っているの？」

セイラの手首にあるのは、待機モードにされた複数のデバイスなのだ。

水銀燈の問いに、セイラは愉しそうに答える。

「ええ、そうよ。ショーを愉しむ為の工夫の一つよ」

基本的に、魔導師一人につきデバイスは一個である。魔力資質や、その魔導師の戦闘スタイルに合ったタイプを持たせる等、理由は幾つかある。

しかし、セイラは拳銃型、剣型とその他複数のデバイスを所有しているのだ。通常では考えられない数で、彼女の他にこれ程の数のデバイスを持った魔導師は局内には確認されていない。

更に、普通の魔導師と違う点を、水銀燈は他にも見つけていた。

「『カートリッジシステム』が無いのと『非殺傷設定』を解除してあるのも、愉しむ工夫なのかしら？」

「ふふ、よく見てるじゃない」

水銀燈の気付きに、セイラは感心した笑いを漏らした。

『カートリッジシステム』とは、事前に魔力が込められてる弾丸型のカートリッジをロードする事で、瞬間的に魔導師の実力以上の魔力を爆発させ、魔法の効果を高めるシステムである。しかしながら強力故に不安定要素もあり、現段階では並の魔導師では使用出来ない。だが、セイラはランク的には最低でもSランクを超えており、充分にシステムを使いこなせる実力を備えている。しかし、彼女はデバイスにカートリッジシステムを搭載していない。その理由は、水銀燈が言うように愉しむ為の工夫もあるが、それよりも自信があるからだ。そんなシステムに頼らずとも、自力で魔力を瞬間的に高め、操る術を持っているのだ。

そして、『非殺傷設定』とは、物理破壊を伴わない魔力衝撃の事を言う。基本的に、管理局員に限らず魔導師にはこの非殺傷設定が義務付けられている。設定を解除するのは、よっぽどの緊急事態のみ。しかし、セイラは違う。彼女は管理局の中でも、異質な局員なのだ。局内で唯一階級を持たない『無階級局員』であり、組織内でも高い権限を持っている型破りな局員である。高い階級の人間——例えば元帥に意見する権限もあり、独自の判断で非殺傷設定を解き、犯罪者をその場で合法的に殺す事も許されている。設定を解いているのは、勿論、己の快楽の為だ。

昂る興奮の表れか、セイラはデバイスの刃を舌で舐める。

「納得したかしら？ それじゃあ、続きを始めましょう！」

狂気に満ちた目で、水銀燈に刃を向ける。

剣を交えての、二人の攻防が始まった。刃が衝突する甲高い音を

鳴らし、火花を散らした小競り合いが続く。素人目には互角に見えるだろうが、その実、水銀燈は苦戦していた。特定の型に嵌まらない不規則な剣筋、不気味な狂気、ソレ等が水銀燈を押していた。接近戦の技量では、セイラが上回っている。

分が悪いと判断して、水銀燈は戦法を変えた。宙に飛んで離れ、左右の大きな翼を黒の龍へと変化させる。そのまま左右から挟み撃ちにするように攻撃を仕掛けた。タイミングはバッチリで、回避する事は不可能。

確実に捉えたと思った水銀燈だったが、信じられない光景が目に見え、飛び込む。

セイラの手から剣が消え、即座に銃型デバイスが両手に握られ、素早く左右の龍に照準を合わせた。次の瞬間、数発の弾丸が発射され、口を開けて迫りくる龍の顔面に風穴を幾つも開ける。

「くっ！」

神業のようなセイラの反撃に顔を歪める水銀燈だが、すぐに追撃を試みる。

左右の翼を合わせ、先ほどよりも倍以上の巨大な龍を形成して、セイラに襲い掛かる。この大きさの龍相手に、銃撃は通用しない。今度こそ決まると思われたが、またも水銀燈の確信は破られる。

セイラは素早くデバイスチェンジをして、新たな武器を手につく。今度のデバイスは、身の丈以上の大きさがある巨大な斧だった。黒光りする斧の刃は、相手の命を刈り取るような不気味さを感じられる。迫りくる龍の牙が届く刹那、狂気染みた笑みを浮かべるセイラが巨大斧を横に振り抜いた。豪快に振り抜かれた巨大斧の刃は、龍の頭を横真つ二つに両断した。

「なっ!？」

驚愕を禁じ得ない水銀燈は、目を見開いた。ソコに一瞬の隙が生まれた。

セイラは隙を見逃さず、地を蹴って跳躍する。動揺してる水銀燈の前に、歪んだ笑顔を現す。

我に返った水銀燈は、急いで翼で防御しようとした。だが、僅かに遅かった。既にセイラは巨大斧を構えており、魔力を上乗せして威力を高めた一撃を繰り出す。左肩から斜めに体を斬られ、水銀燈は地面に落ちる。

「ぐっ……！」

地面に強打して、水銀燈は鈍い声を漏らす。

幸い、中途半端な翼の防御で、巨大斧による致命傷は免れた。しかし、傷は決して浅くは無かった。逆十字のドレスは破れ、傷を負った白い身体を露ホデイにしている。本来なら滑らかで美しい身体に、周囲にヒビが走った切り傷が出来ている。

傷を押さえて、水銀燈は息を荒くさせる。

弱った水銀燈を見て、セイラは興奮して舌舐めずりをした。

「いいわよお、その姿……！ 興奮して濡れそうだわぁ……！ でも、もうおしまいなのかしらぁ？ やっぱり貴女はジャンクなの、水銀燈？」

最後の言葉に、水銀燈は目を剥いた。

セイラが、何故自分の事を知っているのか、そんな事はどうでもよかった。ただ、彼女の言った言葉が許せず、怒りが込み上げてきた。憎しみに顔を歪め、鬼気迫る声で叫んだ。

「私はジャンクなんかじゃないっ！」

＊

プレシアに手を引かれ、リンは洞窟内を走っていた。

走りによる疲労以上に、リンは疲れを感じていた。理由は簡単だ。水銀燈が例の女局員と闘って、魔力を消費してるのだ。魔力の消費は、リンの体力消耗に繋がる。だから、水銀燈が闘っている事は解る。

そして、胸の中に巣食う不安も、広がり、強くなっていく。

アレはダメだ。

アレは危険だ。

アレは相對してはいけない相手だ。

アレは闘ってはいけない相手だ。

プログラム

ラインフォースの中に巣食っていた闇よりも、危険なのだ。闇は見た目の恐さがあったが、あの女局員はそんな表層的な恐ろしさではない。狂気染みた外見も恐ろしいが、それよりも常軌を逸した狂気が渦巻く中身が恐い。

そして、強い。単純な戦闘能力でも、闇よりも上のハズだ。

リンは、相手の実力を的確に見極める能力など持ち合わせていない。だが、確信はあった。能力把握の能力など無くても、大まかな危険度は解る。

体力の消耗以外にも、収まらない胸騒ぎにリンは顔を辛そうに歪める。

「あの、テストロッサさん……！」

「何？」

「ちょっと、疲れた、んで……休んで、いいですか……？」

今のリンには、走る体力は残って無かった。肩で息をして、疲労

のあまり足もガクガクと笑うように震えていて、立っているのもやつの状態だ。

プレシア自身も病の体で無理したからか、異論無く休憩に入った。腰を降ろして、胸に手を添えて呼吸を整えている。

リンも冷たい地面に座り込んで、少しでも体を休める。

走ってる間も、今も脳裏に過るのは水銀燈の姿だった。水銀燈が負けるなんて考えたくないが、相手があの女局員だと不安が拭えない。落ち着かなくて、自然と貧乏ゆすりをしてしまう。

助けに行きたい気持ちだが、無い訳じゃない。しかし、自分なんかが行ってどうなる。魔法も使えない自分が行っても、邪魔になるだけだ。だからこそ、水銀燈は弱ってるプレシアと一緒に自分を闘いの場から追い出したのだ。そんな事くらい、解っている。そう、頭では自分の無力さを理解している。だが、感情はそうはいかない。胸の内から、助けに行きたい気持ちが込み上げてくる。

膝の上で握り拳を固め、歯を食いしばって葛藤する。

その時、水銀燈の小さな背中が頭に浮かんた。

リンは、決心した。

多少整った息遣いで、リンは言った。

「テストロッサさん」

「何かしら？」

「あの……俺、戻ります」

リンの言葉に、プレシアは驚いたように目を見開いた。しかし、動揺もすぐに収まり、冷静さを取り戻して訊いた。

「貴方、本気で言ってるの？」

「はい」

今までのような歯切れの悪さや曖昧さは無く、リンはハッキリと

答えた。

決然としたリンの返答に、今度はプレシアは僅かに目を細めた。リンの決意が本物なのか、その真偽を確かめようとしてるようだ。

「彼女が、何故私達を場から追い出したか解っているの？ あの場に居ても、足手まといになるだけだからよ」

「ソレは解ってます。馬鹿な俺でも、力の差くらいは解ります。でも……それでも俺、行きたいんです！」

これだけは譲れないと、リンは僅かに身を乗り出した。その顔には、普段には無い真剣さが表れていた。

一歩も引き下がらないリンを見て、プレシアは怪訝そうに訊いた。

「貴方も、あの局員の危険さは感じたでしょう？ 行けば自分が殺されるかもしれないわよ？ それでも、行くの？」

「はい。その……後悔したくないから……」

柄にもない事を言って、妙に気恥ずかしくなるが、リンは続ける。

「ココで動かなかったら、多分、いや、きっと後悔すると思うんです。俺、水銀燈を見捨てたくないんです」

顔を熱くさせて、自分はシリアスな空気には向いてないとリンは思った。緊急事態だと言うのに、らしくない台詞を恥ずかしく思っているのだから。

リンの決意が伝わったのか、プレシアは口を閉じて見つめている。ややあって、溜め息をついた。

「……分かったわ。行ってきたさい」

「テストロッサさん……！ すみません。ありがとうございます！」

プレシアの了解を得て、リンの顔が明るくなる。

「水銀燈を連れて、すぐ戻ってきますから！」

立ち上がり、身を翻してリンは来た道に戻った。

リンの背中が見えなくなり、プレシアは抱いてる娘に目を向けた。

「アリシア……」

優しく娘の頭を撫で、脳裏に過去の記憶が蘇る。

上層部からの指示に逆らえず、無茶な実験を決行したあの忌まわしき日である。次に浮かんだのは、先ほどのリンの言葉だった。

後悔したくないから。

リンの言葉を何度も脳内で反芻して、プレシアは哀しげな表情になる。

「あの時……私も彼のように動いていれば、貴女を失わずに済んだのかしら……アリシア……」

＊

リンは、思った以上に体力を消耗させていた。

もはや走る事は出来ず、歩くのも億劫に思える程に疲労していた。事実、洞窟内を進むリンは足を完全に浮かせず、引き摺るように歩いている。この明らかな疲労は、水銀燈の魔力消費を表している。

思った通り、水銀燈はセイラに苦戦しているようだ。気持ちばかりが急いで、リンは表情を陰しくさせる。

早く。

早く。

早く。

空洞を進むと、奥から音が聞こえてきた。空洞で起こってる戦闘の音だ。流行る気持ちを必死に抑え、リンは静かに空洞の入り口から顔を覗かせ、中の様子を見た。

「……っ！」

目に飛び込んできた衝撃の光景に、思わずリンは声を上げそうになった。

空洞の中には、体中ボロボロになった水銀燈が居た。ドレスは所々破れ、体のいたるところには傷を負い、ボロ雑巾のように酷い状態になっている。予想はしていたが、予想以上に酷い有様を目の当たりにして、リンは絶句した。

対するセイラは、殆ど無傷だった。制服に埃等の汚れは付いてるが、目立った傷は見当たらない。

戦況は圧倒的に水銀燈が不利で、追い詰められていた。

今すぐにでも飛び出て、水銀燈を助けたい。だが、事はそう簡単ではないのだ。仮に飛び出てセイラの注意を引き付けても、一時的な対処にしかない。無策じゃ駄目だ。本当に水銀燈を救いたければ、何か策を練らなければならない。

しかし、だからと言って、そう長く考えてる時間は無い。

——どうすればいい？ どうすれば……？

考えるんだ。非力な自分に出来る事など、考える以外に無い。冷静になるよう努め、足りない脳味噌をフル回転させて、必死に考える。

——考えろ……！ 考えるんだ、俺……！

水銀燈は明らかに弱っている。相手のセイラの実力は圧倒的だ。真正面から挑んでも、勝てないのは目に見えている。実力で劣る自

分達が勝つには、相手の虚を衝くしかない。

どうしたら相手の隙を作れる？

思考する中、ハッとリンはある可能性に気付く。

「勝てる……！ いや、勝てるかもしれない……！」

思考の末に見つけたか細く頼り無い“理”だが、全く可能性が無い訳では無い。

このまま何もしないで手をこまねいてるより、まずは実行してみるべきだ。

やる決意は固まったが、一つだけ問題があった。ソレは、闘いの場に居る水銀燈に作戦を伝える連絡手段だ。リン一人で勝手に行動すれば、おそらく彼女も動じてしまう。ソレを避けるには、水銀燈にも作戦の内容を伝える必要がある。

「ああ、ちくしょう！ どうすりゃあいいんだ!？」

連絡手段が浮かばず、イラつくリンは頭を掻き乱す。

何かないか？ 何か……？

相手にバレずに、仲間だけに作戦を伝える方法。そんな魔法みたいな事が、と思った時だった。

——あ、あああああああ！

またしても、リンの中で閃きが走った。

今日の俺は、自分でも恐い位に冴えてる。閃いたリンは、そう思った。

恍惚な表情を浮かべていたセイラは、傷付いた水銀燈を見て物足りなさそうに眉を顰めた。

「残念だわ、水銀燈。もう少し愉しめると思ったけど、『失敗作』の貴女では、この程度で終わりのようね」
「くっ……！」

水銀燈は悔しそうに顔を歪め、見下ろしてくるセイラを睨む。
その目には、自然と涙が浮かんでいた。胸の内から湧き上がる感情を抑え切れず、目から溢れ出てくる。

「違う……！」

感情は声となって、口からも出た。

「私は、『失敗作』なんかじゃない……！ ジャンクなんかじゃ……
…ジャンクなんかじゃ、ない……！」

自分の肩を抱き、涙声で誰にともなく訴える。

自分を否定する言葉が、彼女の胸に突き刺さり、脆弱な精神が崩れかける。心身ともに追い詰められて、水銀燈は限界間近だった。

私はジャンクなんかじゃない。

出来損ないの『失敗作』なんかじゃない。

だから、だから私を独りにしないで。

私を捨てないで。

（水銀燈！）

縫^{すが}るように願う水銀燈の中で、突然声が響いた。聞き覚えのある声に、水銀燈はハッと泣き顔を上げた。

「え……？」

茫然とする水銀燈の中で、また声が響く。

（水銀燈！ 聞こえたら返事して！）

（リ、リン……！？）

（水銀燈！ 良かったあ、通じたぞ！）

念話。魔導師同士で行われる、テレパシーのような会話手段である。本来なら魔力を持つ魔導師にしか使えないのだが、水銀燈と契約して繋がりを得ているリンも、彼女とのみ念話が可能となった。

魔導師の話聞いて、念話の事は知っていた。水銀燈と念話が通じるかは、正直なところ自信は無く、賭けだった。

しかし、リンはその賭けに勝った。

連絡手段を得たリンの声は、心なしか弾んでいた。

（実は今、水銀燈達が居る洞窟の入り口前に居るんだ）

（なっ……！？ あ、貴方、何しに来たの！？）

（何しにって、その……水銀燈を助けに……）

弱々しい様子から一転して、声を荒げる水銀燈に、リンは気圧されながらも答えた。

理由を聞いた水銀燈は、目を見開いて動揺を顔に表した。対峙してるセイラは、水銀燈の変化を怪訝そうに見ている。

目の前のセイラに意識を向けつつ、水銀燈は訊いた。

（……どうして戻ってきたの？ どうして私を……？）

（いや、その……ほら、前に俺言ったじゃん？ 水銀燈が好きだって。だから、水銀燈の事見捨てたくなくて……）

理由を聞いて、水銀燈は心が大きく揺れた。

認めたくない、けれど求めていた気持ちだが、心中に生まれていた。そして、その気持ちをリンに悟られるのを嫌った。今まで水銀燈は、自分の弱味を他人に見せまいと強くあり続けてきた。隠し続けてきた弱味を、リンに見せたくないかった。

リンに心の内を悟られないように、努めて水銀燈は普段の調子で答えた。

（貴方って、本当におばかさんねえ）

（自覚はしてるよ。でも、この窮地を乗り切る策は考えてきたよ）

複数のデバイスを操り、水銀燈を圧倒するセイラ。

この怪物攻略に、リンが見出した突破口とは？

怪物 対 落ちこぼれ。

その勝負が、大きく動き始める……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2827x/>

コンビ 運命改変ゲーム

2011年10月22日06時21分発行